

日本薬学の復興
—戦中から戦後の歩み—

東京大学薬学図書館展示
2024年7月16日—9月17日

日本薬学の復興－戦中から戦後の歩み－

はじめに

I. 三代目教授への継承	1
II. 戦時下の薬学科	4
III. 焦土からの復興	7
IV. 薬学教育の改革	10
V. 日本薬剤師協会の設立と「医薬分業法」の制定	12
VI. 薬学科の発展	15
VII. 戦後の二代目教授	19
VIII. 東京大学薬学部創立	23
IX. 三代目教授の事績	24

おわりに

< 人物編 >

菅澤重彦	35
落合英二	36
石館守三	37
秋谷七郎	39
浅野三千三	40
伊藤四十二	41
柴田承二	42
野上寿	43
高木敬次郎	44
年表	45
昭和期 卒業生	47

〈通史編〉

日本薬学の復興－戦中から戦後の歩み－

はじめに

大正から昭和 10 年代にかけて二代目教授の慶松勝左衛門、近藤平三郎、朝比奈泰彦、服部健三、緒方章が東京帝国大学医学部薬学科を牽引し、留学で習得した最新の学問を導入し、研究分野の領域を拡大し、近代日本の薬学発展に多大な尽力を果たした。しかし、昭和 10 年代には退職の時期を迎えることになった。

慶松、近藤、朝比奈は退職し、服部は逝去し、緒方は長老教授となり、戦時下の世代交代となった。太平洋戦争の未曾有の敗戦により国土は灰燼に帰し、焦土と化した。が、戦中から戦後にかけて慶松、近藤、朝比奈、緒方は薬学界の長老として薬学研究・教育の充実、薬事制度改革に尽力した。

三代目教授の菅澤重彦、落合英二、石館守三、秋谷七郎、浅野三千三、伊藤四十二、柴田承二、野上寿、高木敬次郎は戦中から戦後にかけて日本薬学の復興を果たし、念願の薬学部独立を実現するのであった。

I. 三代目教授への継承

昭和 6 (1931) 年 9 月、関東軍による満洲事変が勃発し、昭和 7 (1932) 年 3 月に満洲国が建国された。さらに昭和 8 (1933) 年 2 月、関東軍は熱河省に進攻し、昭和 10 (1935) 年 12 月、華北に冀東防共自治政府を樹立させた。

さらに、昭和 11 年 2 月 26 日、陸軍皇道派青年将校による「二・二六事件」が起きた。時勢は一変し、戦時体制が強化されていく中、二代目教授も退職の時期を迎え、戦時下の世代交代となった。

昭和 12 (1937) 年 3 月、慶松勝左衛門教授 (薬品製造学講座) が停年により東京帝国大学を退職した。慶松教授の後任は菅澤重彦助教授が昇任した。菅澤教授は大正 11 (1922) 年 3 月、東京帝国大学医学部薬学科を卒業した。慶松教授に師事し、グルタミン酸、オルニチン、リジンなどアミノ酸類の新合成法を開発した。

昭和 4 (1929) 年、イギリスに留学し、ロンドン大学の R・ロビンソン教授の下で植物塩基とその類似化合物の合成研究に従事し、昭和 7 (1932) 年 3 月帰国し、薬品製造学講座助教授に就任した。

菅澤教授はロビンソン教授に学んだ植物塩基の含窒素異項環状化合物の合成を研究の主力とし、インドール系化合物、キノリン研究に成果を上げた。昭和 18 (1943) 年 5 月、「ジベンツォヒノリン並びにジベンツォヒノリチン誘導体の合成研究」で帝国学士院賞を受賞した。¹⁾

昭和 12 (1937) 年 12 月、近藤平三郎教授 (薬化学講座) が停年により東京帝国大学を退職した。近藤教授の後任は落合英二助教授が昇任した。

落合教授は大正 11 (1922) 年 3 月、東京帝国大学医学部薬学科を卒業した。近藤教

授に師事し、オオツヅラフジのアルカロイドに関する研究を行い、昭和 5（1930）年 3 月、助教授に昇任した。同年、ドイツに留学し、フライブルク大学のスタウディンガー教授の下で有機化学、ボン大学のプレーグル教授の下で有機金属錯体、オーストリアのグラーツ大学のプレーグル教授の下で有機微量分析を学び、昭和 7（1932）年 9 月帰国した。

落合教授はアルカロイド構造研究の基本骨格である含窒素芳香族複素環状の研究に取り組み、有機電子論を駆使して独自の研究分野を展開した。昭和 19（1944）年 5 月、「芳香族複素環塩素に関する研究」で帝国学士院賞を受賞した。²⁾

昭和 12（1937）年 7 月に勃発した日中戦争は拡大の一途を辿り、長期化した。昭和 13（1938）年 4 月に国家総動員法が制定され、戦争遂行のために必要な労働力・工場・機械・資材などの人的・物的資源を統制・運用できる権限が政府に与えられ、国民生活は戦時体制下に置かれた。

昭和 15（1940）年 10 月に価格等統制令が発動され、昭和 16（1941）年 5 月の医薬品及衛生材料生産配給統制規則制定により生活必需品である医薬品は統制経済下に置かれ、配給品に指定され、生産、物流も統制された。³⁾

このように戦時体制が強化される中、昭和 16（1941）年 3 月、朝比奈泰彦教授（生薬学講座）が退職した。朝比奈教授の後任は藤田直市助教授が昇任した。藤田教授は明治 45（1912）年 7 月、東京帝国大学医科大学薬学科を卒業した。臓器薬品化学講座の緒方章教授と同期であった。

卒業後は富山県立薬学専門学校に赴任し、大正 9（1920）年 12 月、富山薬学専門学校教授から生薬学講座の助教授に任命された。生薬の組織と形態学を専門とし、昭和 2（1927）年ドイツのベルリン大学薬学教室に留学した。⁴⁾

昭和 16（1941）年 12 月 8 日、真珠湾攻撃により太平洋戦争が始まった。その 2 日後の 12 月 10 日、薬品分析化学講座の設置の件が公布された。設置を企画してから約 20 年が経過し、薬学科の 6 番目の講座であった。昭和 17（1942）年 1 月 10 日、臓器薬品化学講座の石館守三助教授が薬品分析化学講座の教授に昇任した。

石館教授は大正 11（1922）年 4 月、東京帝国大学医学部薬学科に入学し、3 年の時に生薬学教室に入り、朝比奈教授に師事した。朝比奈教授の「被造物の一つ、植物標本の一握りさえ与えられるなら、一生を譬え牢獄に呻吟しようとも、あえて後悔しない」という自然科学者の心境に接して心を揺さぶられ、卒業後は生薬学教室の副手を経て、昭和 9（1934）年 5 月に助手となった。

その間、朝比奈教授の指示で医学部薬理学教室の田村憲造教授に協力し、樟脳の生化学研究を行い、樟脳の強心・中枢興奮作用を発言する本態を突き止め、ピタカンファーを創製し、昭和 7（1932）年、武田薬品から強心剤として発売された。

昭和 11（1936）3 月ドイツに留学し、ハイデルベルク大学のクーン教授の下でアミノ酸、ベタイン系化合物の合成など有機化学を学び、さらにオーストリアのグラーツ

大学のプレーグル教授に有機微量分析法、ウィーン大学のファイグル教授に発色反応、チェコのプラーク大学のハイロウスキー教授にポーラログラフ法を学び、昭和 13（1938）年 7 月帰国した。

昭和 14（1939）年 4 月、高木助教授（臓器薬品化学講座）が京都帝国大学医学部薬学科教授（薬品分析化学講座）に就任したため、その後任として助教授に就任し、昭和 17（1942）年 1 月、薬品分析化学講座の教授に昇任した。昭和 18（1943）年 5 月、田村憲造・石館守三・木原玉汝「樟脳の強心作用の本態に関する研究」で帝国学士院賞を受賞した。⁵⁾

昭和 17（1942）年 3 月 25 日、服部健三教授（衛生裁判化学講座）が 57 歳で逝去した。昭和 6（1931）年 2 月、医学部 1 号館が竣工し、生化学教室は新館に引き上げ、薬学部本館も関東大震災により亀裂が入り、危険な状態になったので、衛生裁判化学教室を東館地下室に移した。しかし、生化学教室に巣くっていた炭疽菌が服部の首筋の剃刀傷に侵入し、その頃から健康状態が思わしくなかった。⁶⁾

服部教授の後任は東京薬学専門学校女子部校長の秋谷七郎が就任した。秋谷教授は大正 12（1923）年 3 月、東京帝国大学医学部薬学科を卒業した。衛生裁判化学教室の副手を経て大正 14（1925）年助手となった。昭和 7（1932）年東京薬学専門学校女子部教授になり、昭和 10（1935）年校長に就任した。⁷⁾

太平洋戦争は緒戦の快進撃から昭和 17（1942）年 6 月のミッドウェー海戦の敗北を契機に守勢に回り、ガダルカナル島撤退、アッツ島玉砕、トラック島空襲、インパール作戦の失敗など戦局は悪化の一途を辿った。大学・専門学校の修業年限は短縮し、昭和 18（1943）年 10 月、学徒出陣壮行会が举行された。昭和 19（1944）年 6 月サイパン島が陥落し、アメリカ軍の本土空襲が始まり、やがて本格化した。

昭和 19（1944）年 12 月 27 日、藤田直市教授（生薬学講座）が食糧事情の悪化による体力の消耗が重なり、急逝した。敗色が濃厚な状況下、藤田教授は既に病を得ていたが、防空壕設営、重要な図書、機器類の疎開作業の陣頭指揮に立っていた。⁸⁾

藤田教授の後任は東京帝国大学伝染病研究所教授（化学部長）の浅野三千三が就任した。浅野教授は大正 8（1919）年 3 月、東京帝国大学医学部薬学科を卒業した。朝比奈教授に師事し、大正 14（1915）年金沢医科大学附属薬学専門部教授となった。昭和 2（1927）年から 3 年間、ドイツに留学した。

昭和 11（1936）年「地衣脂肪酸並にプルヴィン酸系色素に関する研究」で帝国学士院賞を受賞し、昭和 13（1938）年 4 月、東京帝国大学伝染病研究所教授（化学部長）に就任した。昭和 16（1941）年 3 月、朝比奈教授の退官に伴い、東京帝国大学医学部教授を兼任し、植物化学の講義と実習を担当した。⁹⁾

世代交代の結果、昭和 20（1945）年 1 月、薬学科の陣容は以下のとおりとなった。

第一講座（衛生裁判化学） 秋谷七郎教授 塚元久雄助教授

第二講座（薬化学） 落合英二教授 津田恭介助教授

第三講座（生薬学） 浅野三千三教授

薬品製造学講座 菅澤重彦教授 里田勲助教授

臓器薬品化学講座 緒方章教授 伊藤四十二助教授

薬品分析化学講座 石館守三教授 百瀬勉助教授

II. 戦時下の薬学科

太平洋戦争開始に先立ち、昭和 16（1941）年 10 月 16 日、「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」が公布された。これにより、昭和 17（1942）年 3 月卒業予定者の修業年限が 3 ヶ月短縮され、昭和 16（1941）年 12 月に繰上げ卒業となった。翌年度から修業年限は 6 ヶ月短縮となり、9 月卒業になり、夏冬の休暇も短縮され、入学時期も 10 月になった。

医学・薬学の学生は学徒出陣には参加しなかったが、教室員は軍医・薬剤官として出征した者が続出した。研究資材は乏しく、電気・ガス・水道は使用制限され、生活条件も悪化する中で教育と研究の命脈を保ち続けた。

昭和 18（1943）年、在郷軍人東大分団医学部班が結成され、薬学科は教授の指揮下で教職員が教室周辺に防空壕の設営作業、重要な図書、機器類の疎開作業に忙殺された。学生の勤労働員は終戦間際に千葉県下の農耕作業に従事した程度で済んだ。昭和 20（1945）年 3 月 10 日の東京大空襲で本郷界限は一面猛火に包まれたが、大学の被害は少なかった。占領後に使用する施設として米軍の爆撃目標から意図的に外されていたと思われる。¹⁾

昭和 17（1942）年 1 月、科学技術行政機関として技術院が設置された。昭和 18（1943 年）10 月、技術院の主導により臨時戦時研究員設置制が公布され、科学者も軍事協力を余儀なくされた。

昭和 18（1943）年、ドイツ駐在陸軍武官から米国が DDT（殺虫剤）をアフリカ戦線の将兵に与えて防疫に成功した情報が入ったので、陸軍省は陸軍軍医学校にその調査研究を命じた。当時、陸軍省囑託であった秋谷七郎教授（衛生裁判化学講座）を中心に研究に当たり、DDT（殺虫剤）の合成に成功した。²⁾

秋谷教授は潜水艦で使用する味噌のカビを防止するためにクエン酸の添加を試み、カビ防止の効果以外に乗組員の疲労度が目立って低くなり、健康状態が著しく向上し、尿中の乳酸量が減少する事実を突き止めた。³⁾ その他、マラリアの治療薬であるキニーネの代用薬、軍服のカーキ色の低温染色法研究に力を注いだ。⁴⁾

昭和 18（1943）年 12 月 21 日、陸軍軍医学校の稲垣克彦少佐は文部省科学官の長井維理（長井長義の次男）からドイツの雑誌「Klinische Wochenschrift（臨床週報）誌」を手渡された。同誌にはベルリン大学薬理学教室のマンフレッド・キーゼ博士が執筆したペニシリンに関する総説が掲載されていた。日本からドイツに派遣した伊号第八潜水艦によって運ばれたのであった。

昭和 19 (1944) 2 月、稲垣少佐と東京帝国大学伝染病研究所の梅澤濱夫助教授の主導で日本独自のペニシリンの研究開発を目的としてペニシリン委員会が設置された。ペニシリン委員会は医学・薬学・理学・農学の著名な研究者で構成され、薬学からは石館守三教授 (薬品分析化学講座)、東京帝国大学伝染病研究所化学部長の浅野三千三教授が参画した。⁵⁾

石館教授は新聞のニュースなどに基づき英米のペニシリンについて推理し、「チフス菌に強い効力のあるシュワルツマン濾液についても研究の要があります。いずれも構造が判れば、合成は不可能ではありません」と述べ、常に意欲を燃やしていた。⁶⁾

浅野教授は地衣成分から抽出した 37 種の構造既知物質を始め、下等植物や微生物からの生産物、それらの関連物質を数多く合成し、積極的にその抗菌作用研究に取り組んだが、ペニシリンその他の抗菌物質の発見には至らなかった。

しかし、ペニシリンの研究は進展し、昭和 19 (1944) 年 9 月、全ての有望株を東京帝国大学伝染病研究所に集中し、研究を推進することになった。同年 10 月に日本独自のペニシリンの完成が確認されたので、萬有製薬と森永薬品がペニシリンの工場生産を開始し、軍に納入した。⁷⁾

慶松勝左衛門、近藤平三郎、朝比奈泰彦の二代目教授は停年後も薬学界の重鎮として薬学研究・教育、薬事行政において重要な役割を果たした。

慶松は昭和 12 (1937) 年 3 月停年により退職したが、翌 4 月 1 日付で京都帝国大学医学部薬学科創設事務嘱託に任じられた。慶松は大蔵省と折衝し、寄付金集めに奔走し、近藤、朝比奈の両教授と教授陣の人選を慎重に進めた。昭和 14 (1939) 年 4 月、京都帝国大学医学部薬学科が創設され、薬品分析化学講座と薬品製造学講座の 2 講座を設置された。さらに、昭和 15 (1940) 年 6 月に有機薬化学講座、同年 12 月に無機薬化学講座、昭和 16 (1941) 年 4 月に生薬学講座が設置され、5 講座となった。

慶松は薬学科の編成に当たり、有能な薬学研究者及び製薬技術者の養成と新薬の総合的研究など製薬業界に役立つ実質主義に力点を置いた。また、慶松の企画により旧医化学教室を増改築して薬学科教室を建設し、最新の製薬機械、実験器具、光学実験装置を取り付け、内外の文献、標本を購入し、研究・教育の充実に万全を期した。⁸⁾

日中戦争が長期化し、昭和 13 (1938) 年 4 月に国家総動員法が制定され、戦争遂行のために必要な労働力・工場・機械・資材などの人的・物的資源を統制・運用できる権限が政府に与えられ、国民生活は戦時体制下に置かれた。

昭和 15 (1940) 年 10 月に価格等統制令が発動され、昭和 16 (1941) 年 5 月の医薬品及衛生材料生産配給統制規則制定により生活必需品である医薬品は統制経済下に置かれ、配給品に指定され、生産、物流も統制された。⁹⁾

昭和 16 (1941) 3 月、厚生省衛生局長灘尾弘吉の要請で全国薬事団体を統合する薬事報公会が会長大口喜六、副会長河合亀太郎、服部健三、塩野義三郎の構成で結成され、慶松は顧問に就任した。慶松は医薬品の生産拡大に力を注ぐことを主張し、医薬

品の国産奨励、代用品の研究、天然資源の薬用利用を進めた。¹⁰⁾

昭和 16 (1941) 年 12 月 8 日、真珠湾攻撃により太平洋戦争が始まり、医薬品の生産高は上昇し、昭和 17 (1942) 年に最盛期に達した。しかし、次第に原料資材が欠乏し、動力源の制限に加えて、従業員の応招が相次ぎ、生産量が減少していった。

昭和 18 (1943) 年 10 月、統制会社令が公布され、売薬以外の医薬品の生産、配給を統制する公的機関の設置を急ぐことになり、昭和 19 (1944) 年 1 月、医薬品統制株式会社が設立された。そして、会社の使命を公正無私に遂行できる強固な意志を有し、清廉達識の士として慶松に社長の白羽の矢が立った。

愛弟子の菅澤重彦は当時の慶松について「今次大戦に対し先生は始めから強硬な反対論者で、よく電車中などで当時の軍部の無謀をののしられ、故服部教授の如きは先生の身边を気遣われて時々注意しておられたようである」と回顧している。¹¹⁾

しかし、慶松は医薬品生の品薄という危機的状況を黙示することができず、「一死報国を文字通り行くのです」と悲壮な決意で社長を引き受けた。そして、軍部の圧力で軍需優先が幅をきかす中で民需の確保に必死の努力を惜しまず、国民の保健・医療を無視する軍部の横暴を憤慨して憚ることはなかった。

また、医薬品の品質確保と生産力増強に努力を傾注し、厚生省と論争することもしばしばあった。日頃は仲の良い長男の厚生省製薬課長慶松一郎と「公式の会議の場では別人のように、お互いの立場を主張して真剣に渡りあうので、周囲のひとたちをはらはらさせる場面も珍しくなかった」という。¹²⁾

近藤平三郎は昭和 12 (1937) 年 12 月停年により退職し、乙卯研究所所長として後進の指導育成と薬学研究を続け、昭和 17 (1942) 年 10 月には大連の満洲薬学会でビスコクラウリンに関する講演を行った。しかし、時局の切迫した状況は近藤にも容赦なく波及し、「苦手の日本薬剤師会長のお鉢が、思いもかけぬ方向からやって来た」のであった。¹³⁾

昭和 18 (1943) 年 3 月、厚生省は「薬事衛生の適正を期し、国民体力の向上を図る」ことを目的として薬事法を公布し、「日本薬剤師会及道府県薬剤師会は薬事衛生の改良発達を図り国民体力の向上に関する国策に協力する」ことと定められた。薬事法に続いて同年 10 月、薬剤師会令が公布され、日本薬剤師会会長は厚生大臣の奏請によって内閣が任命することになり、東条英機内閣の厚生大臣小泉親彦が近藤を会長に指名した。小泉と近藤は陸軍軍医学校時代の同僚で懇意な間柄であった。

近藤は防空・防毒の実習、保健衛生を重点に全国主要都市で講習会を開催した。また、昭和 20 (1945) 年 1 月、厚生省、文部省の指示により薬学科以来の盟友の慶松が社長を務める医薬品統制株式会社と協力して集団疎開学童用の医薬品を疎開地に送ることも実現し、集団疎開学童の 70% に「しらみ」が発生したため、除虫菊粉末 10 万袋を疎開地に急送した。¹⁴⁾

朝比奈泰彦は昭和 16 (1941) 年 3 月停年により退職した。最終講義は 3 月 8 日、医

学部本館大講堂で行われ、朝比奈は万雷の拍手に迎えられ、「薬学三十年の回顧」と題して以下のように語った。

「大正元年助教授として任官当時抱いた理想は、わが国の薬学を一日でも早く世界の薬学の水準に引上げることであった。その信念は三十年一日の如く変わらず、その間、各教授や出身者諸君と共に努力を重ね、大正十年以降は外国薬学界にも認められるようになったが、世界の水準は一層速度を増して上昇するから、その格差は今後の奮闘によって埋められなければならない」

朝比奈は無量の感慨を込めた最終講義を終えると 30 年の充実した悔いなき大学生活に訣別し、足早に最終講義の大講堂から姿を消したという。¹⁵⁾

6 月 23 日、薬学科主催の退職記念会が先輩、同僚、多数の門下生の出席の下で行われたが、朝比奈の挨拶は聴く者の心を揺さぶった。朝比奈は数多の逸材を世に送り出したが、その一人石館守三は後年、深い感慨を込めて次のように回顧している。

「人生と業績は、その人によってのみ創造される芸術品に譬えられる」とは、朝比奈先生が大学を去るときの訣別の一句であった。再び繰り返すことの出来ない人生は、寸時を惜しんで、与えられた環境と素材をもって、できるだけ傑作を作るよう精進すべきもの、との意味であろう。先生の辿った道とその心構えを案ずると、この姿勢が一生を貫いているように思われる」¹⁶⁾

昭和 18 (1943) 年 4 月、朝比奈は文化勲章を受章した。薬学分野で初の受賞で薬学、化学、植物学の三科を統合的に研究し、万人未踏の境地を開いた「漢薬成分の研究」が高く評価された。それは多年に渉り、ひたむきにたゆまぬ努力を積み重ね、研究一筋に歩んだ人生がもたらした栄誉であった。

Ⅲ. 焦土からの復興

昭和 20 (1945) 年 8 月 14 日の御前会議において昭和天皇の裁可を仰ぎ、7 月 26 日に連合国から示されたポツダム宣言の受諾を決定した。翌 15 日、昭和天皇が「終戦の詔書」を放送し、9 月 2 日、東京湾内に停泊する戦艦ミズーリ甲板で降伏文書に調印し、太平洋戦争が終結した。8 月 30 日、連合国軍最高司令官のダグラス・マッカーサー元帥が厚木飛行場に降り立ち、日本は GHQ (連合国軍最高司令官総司令部) の占領下に入った。

薬学科は 9 月 30 日に昭和 20 年度の卒業生 35 名を送り出し、3 学年と 2 学年は 10 月 15 日から新学期を開始した。昭和 21 (1946) 2 月大学令が改正され、修業年限 2 年半は昭和 21 年・22 年度の卒業生が終止符を打たれ、修業年限は 3 年、新入生の入学時期も 4 月に復した。戦後の極度の食糧不足、インフレは本土空襲の被害から危うく免れた東京帝国大学にも容赦なく押し寄せ、教室は人員が揃わず、器具、薬品類は品不足で高騰し、電力制限により研究が阻まれた。

薬学科助手は医学科助手と合同の助手会を結成し、共通の事務処理は共同で当たる

ことになった。昭和 21（1946）年結成時の助手会は医学科 11 名、薬学科は奥井誠一（衛生裁判化学教室）、浜名政和、檜田義彦（薬化学教室）、川崎敏男（生薬学教室）、赤星三弥（薬品製造学教室）、高木敬次郎（臓器薬品化学教室）、上田陽（薬品分析化学教室）であった。

助手会は研究機能を速やかに回復し、計画的に運営するため、営繕課の電力の自主管理を申し入れて、許容量を点検し、調整を図った。莫大な水道料の負担を軽減するため、井戸水に切り替え、研究費の配分を合議制にするなど連携を密にして終戦後の混乱に処した。¹⁾

また、昭和 19（1944）年 11 月頃から本土空襲が本格化し、医薬品産業の生産力は激減し、終戦直後は壊滅的状态であった。特に三共、第一製薬、山之内製薬など東京の製薬会社に被害が大きかった。米国戦略爆撃調査団は「医薬品、医療材料はひどい欠乏状態にあり、国民の健康は危殆に陥っている」と報告していた。医薬品は GHQ 及び政府の復興・増産政策に組み込まれ、製薬会社は政府が重点品目に指定したペニシリン、サルファ剤、ワクチンなどから生産を開始した。

大手製薬会社に対する金融機関の融資にも優遇措置が取られ、重要医薬品に対する復興金融公庫の融資が認められた。昭和 25（1950）年頃までに復興金融公庫から総額 30 億円の融資を受け、大手製薬会社は資本を増強して、復興へ進んだ。政府の医薬品産業復興策により、原材料の入手も容易になり、医薬品の生産は急速に回復した。

医薬品産業の復興を牽引したのはペニシリンとストレプトマイシンである。昭和 21（1946）年 4 月、GHQ は国産ペニシリンの製造・販売を許可した。太平洋戦争末期の昭和 19（1944）年 10 月、陸軍軍医学校の稲垣克彦少佐と東京帝国大学伝染病研究所の梅澤濱夫助教授の主導で日本独自のペニシリンを完成し、萬有製薬と森永薬品がペニシリンの工場生産を開始していた。

この技術に基づき、昭和 21（1946）年 6 月から 10 月にかけて萬有製薬、森永薬品、わかもと製薬、八洲化学、明治製菓など 8 社が厚生省からペニシリンの製造・販売の許可を受けた。昭和 22（1947）年に入るとペニシリンの製造・販売申請を厚生省に提出した企業は 70 社を超え、日本製鉄、東洋レーヨン、野田醤油、キリンビールなど様々な分野の企業が参入した。

昭和 21（1946）年 11 月、GHQ の要請でテキサス大学微生物学の J・フォスター教授が来日し、ペニシリンのタンク培養による大量生産に適した菌株が譲渡され、それを使用した製造技術の指導が行われた。その結果、昭和 22（1947）年以降、大型タンクによる増産が進み、昭和 24（1949）年には米国、英国に次いで日本はペニシリン生産で世界第 3 位となった。

結核に効果を発揮する最初の新薬ストレプトマイシンも GHQ 及び政府の強力な支援を受け、医薬品産業の復興の一翼を担った。昭和 23（1948）年 12 月、GHQ は発見者の S・A・ワックスマン教授から空輸されたストレプトマイシンの菌株を厚生省予防衛

生研究所抗生物質部長の梅澤濱夫に手交し、日本の製薬会社がストレプトマイシンの生産を開始すると言明し、米国から研究用ストレプトマイシンを輸入すると約束した。昭和 24（1949）年 3 月、ガリオア資金（占領地域救済政府資金）で研究用ストレプトマイシン 200 キロ、11 月には 1400 キロの大量輸入が行われた。政府の結核撲滅対策の一環として大蔵省は生産準備を整えた明治製菓、協和発酵、日本生物化学研究所、科研化学、島根化学の 5 社に 3 億 6000 万円の特別融資を行った。

昭和 25（1950）年 4 月、厚生省の認可を得て、5 社はストレプトマイシンの生産を開始し、7 月に明治製菓が国産第 1 号として製造し、全て厚生省が買い上げた。買い上げの約半数は明治製菓で「ストマイは明治」とさえ言われたが、明治製菓以外は生産能力が低く、当初予定した生産量を確保できなかった。

政府は国内需要を満たすために、大量のストレプトマイシンを輸入し、製薬 12 社（武田薬品工業、三共、塩野義製薬、田邊製薬、大日本製薬、萬有製薬、第一製薬、藤沢薬品工業、山之内製薬、鳥居薬品、小野薬品工業、中村滝製薬）に小分けし、製品化させた。製薬 12 社はストレプトマイシン製造に必要な高度の発酵技術と培養タンクなど大規模設備を有しない製薬専門企業であったが、安定供給に貢献した。²⁾

一方、太平洋戦争末期より本土空襲で医薬品不足は深刻な状況に陥り、終戦後は医薬品の不良・贋造品が国内各地で氾濫していった。特に国民が強く望んでいた抗感染症薬のサルファ剤、栄養補給のビタミン剤、駆虫薬のサントニンに不良・贋造品が多く、一気に社会問題となった。

東京では新橋、有楽町、上野、新宿の焼け跡に闇市が出現し、無免許且つ法外な闇値で不良・贋造品が販売されていた。そこで、昭和 21（1946）年、厚生省は都道府県の協力を得て、全国一斉に不良医薬品の取締りを実施した。³⁾

日本薬剤師会は昭和 20（1945）年秋頃から不良・贋造品を問題視していたが、昭和 21（1946）年 7 月 24 日の理事会で粗悪医薬品撲滅運動の要綱を決定し、日本薬剤師会に「不良薬品撲滅対策中央本部」、都道府県の薬剤師会に「不良薬品撲滅対策部」を設置した。そして、不良品の疑いのあるものは中央本部に送付し、中央本部は品質検査を行い、不良品と断定されたものは製造業者に改善を勧告する。勧告に応じない場合は新聞、ラジオで公表し、地方対策部は該当品の販売中止、現品返戻の措置を取ることになった。⁴⁾

不良・贋造品の横行について警視庁衛生検査所の湯本芳雄技師は「助かるべき患者も無効な贋造医薬品とは知らずに用いるため、死亡するかもしれない。間接殺人である。国民の命の危険を元手に不当な利益を得ている者は厳罰で臨むべきだ」と怒りをぶつけ、三楽病院薬局長の不破竜登代は「悪質業者を断固排撃すると同時に医薬品の選択は薬剤師の知識・技術を充分発揮しなければならない」と訴えた。⁵⁾

国会も遅ればせながら、不良・贋造品問題を取り上げ、昭和 23（1948）年 12 月の衆議院厚生委員会で「不良医薬品取締り対策に関する要望」を決議した。これによ

り、厚生省は不良医薬品防止の協力機関を早急に設置するよう都道府県知事に要請し、昭和 24（1949）年末までにほとんどの都道府県に協力機関が設置された。⁶⁾

不良・贋造品の横行で「医薬品の暗黒時代」となったが、その原因として官僚統制が不良医薬品を生み出す温床になっているという指摘が圧倒的に多かった。当時、電力、燃料を始め医薬品生産に必要な原材料は全て配給制度であり、医薬品も生産から配給・価格決定まで官僚の統制下に置かれていた。

医薬品全国協議会事務局長の久保田誠は「官僚が企業家と結託してやっている賄賂統制は生産・配給・価格など各方面にわたり致命的な欠陥を露呈している。この根源を除くことなしに不良品の駆逐は不可能である」と分析している。⁷⁾

しかし、医薬品の不良・贋造品の横行は昭和 25（1950）年頃まで頂点であった。昭和 26（1951）年に入ると外国からの技術導入が緩和され、武田薬品工業、三共、塩野義製薬、第一製薬、山之内製薬、大日本製薬、藤沢薬品工業の製薬各社はサルファ剤の生産を軌道に乗せた。サントニンも日本新薬が増産し、国内需要を満たすだけでなく、韓国など外国に輸出できる量が確保され、「医薬品の暗黒時代」は幕を下ろしたのであった。⁸⁾

IV. 薬学教育の改革

昭和 20（1945）年 10 月、米国は GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）を日比谷第一生命ビル設置し、日本の非武装化、民主化を基軸とする占領政策を「覚書」という形式で政府に指令し、政治・経済・法制・教育・医薬衛生、農業などの諸分野で改革が行われた。

昭和 21（1946）年 3 月 5 日、米国教育使節団が来日し、3 月 31 日に報告書を提出し、戦後の学制改革が実施された。それによれば、高等教育は少数者の特権ではなく、多数者のための機会とし、官公立学校と私立学校は制度上、行政上の対等性を保障し、一般教養の教育課程を充実するという教育の平準化を基調としていた。¹⁾

医学・公衆衛生分野の教育改革は GHQ 公衆衛生福祉局長のクロフォード・F・サムス軍医大佐の主導で行われた。GHQ 薬学顧問の薬剤師ジョセフ・ブランスキーが窓口になり、昭和 21（1946）年 6 月、薬学教育審議会が設置された。

委員長は日本薬剤師会会長の近藤平三郎が指名され、委員に石館守三、緒方章、河合亀太郎、慶松一郎、清水藤太郎、高木誠司、宮木高明、村山義温など 20 数名が委嘱されたが、その多くは東京帝国大学出身者で構成されていた。

6 月 26 日に GHQ 公衆衛生福祉局長のサムス軍医大佐、リョードン中佐、GHQ 薬学顧問のブランスキー、民間情報教育部ウィグルスワース中佐の出席の下に第 1 回会合が開催され、第 1 小委員会（学科課程と教科書の調査）、第 2 小委員会（免状下附の方法）、第 3 小委員会（学校査察の方針）を設けて、審議を進めた。

また、教育制度改革のために GHQ の要請により設置された教育刷新委員会（委員長

安部能成、副委員長南原繁)は昭和21(1946)年12月、教育の機会均等の趣旨を徹底させるため、国民学校初等科に続く学校は中学校3年・高等学校3年・大学4年とすることを建議した。

昭和22(1947)年3月、学校教育法が公布され、修業年限は小学校6年・中学校3年・高等学校3年・大学4年に変更された。同年9月、帝国大学令が「国立総合大学令」に改題され、条文中の「帝国大学」は全て「国立総合大学」に変更され、東京帝国大学は東京大学に改称された。こうした状況に対応するため、同年7月、東京帝国大学医学部会議室で薬学教育協議会が開催された。

薬学科から菅澤重彦、秋谷七郎、落合英二、石館守三の各教授、伊藤四十二、塚元久雄の両助教授、村山義温(東京薬学専門学校)、鵜飼貞二(金沢医科大学)、平野四郎(明治薬学専門学校)、宮道悦男(岐阜薬学専門学校)などが参集し、熱心に意見交換を行い、薬学教育機関は4年制大学にし、総合大学の場合は薬学を学部とするなどの結論に達した。

同年9月、薬学教育審議会委員長の近藤平三郎が公職追放令に該当したため、委員長を辞任し、村山義温が後任の委員長に就任し、10月の総会で薬学専門学校は4年制の単科大学、または総合大学の薬学部とする方針を決定した。²⁾

昭和24(1949)年から昭和25(1950)年にかけて各地の国立大学では薬学部独立の動きが活発に展開され、代表格の東京大学と京都大学は奮起を促された。東京大学薬学科内では薬学部独立を巡り議論が重ねられたが、講座数が少ないために生じる不利な条件を危惧して現状維持に決着し、京都大学も東京大学に歩調を合わせた。

昭和24(1949)年5月、国立大学設置法のより新制東京大学が発足し、教養学部と教育学部が新設された。同年6月、新制の東京大学第1回入学試験が実施された。同年10月、学部通則が改正され、修業年限を4年とし、前期課程2年は教養学部、後期課程2年は各学部で教育(医学部医学科は4年)することになった。³⁾

他方、千葉大学、金沢大学、熊本大学、長崎大学、富山大学、大阪大学、徳島大学には薬学部が設置された。また、東京薬学専門学校、明治薬学専門学校など旧制の薬学専門学校も新制の薬科大学に昇格し、公立の名古屋市立大学薬学部、岐阜薬科大学が設置された。その結果、戦前は最高学府であった帝国大学と下部の教育機関であった薬学専門学校が同列の新制大学として位置づけられた。⁴⁾

昭和25(1950)4月、大学基準協会は薬学教育基準を制定し、同基準によるカリキュラムを公表した。戦後の医薬学領域の大きな進歩を踏まえ、これを反映した教科目として発酵化学、微生物学、生化学、免疫学、薬理学、薬剤学、製剤学などが導入されることになった。

しかし、戦前の薬学研究は東京帝国大学と京都帝国大学に限定され、高い研究水準を有する薬学研究者の養成を目的としていた。他方、薬学専門学校は薬剤師養成、製薬技術者養成を目的としていた。

また、専門学校は中等学校の卒業生が直接入学できたが、帝国大学は中等学校から旧制学校を卒業しないと入学できないので、修業年限にも長短があり、研究設備、教育施設、教員においても帝国大学と専門学校では格段の差があった。教育の平準化を基調とする戦後の学制改革によって、旧帝国大学と旧専門学校が共に新制大学として一律の教科目を実施することは当初から矛盾を孕んでいたのである。⁵⁾

V. 日本薬剤師協会の設立と「医薬分業法」の制定

昭和 20 (1945) 年 11 月 20 日、薬剤師会令が改正され、日本薬剤師会の役員は会員による公選となり、昭和 21 (1946) 年 2 月 8 日の総会で近藤平三郎が引き続き会長に選任された。近藤は終戦直後の昭和 20 (1945) 年 9 月 22 日の日本薬剤師会理事会で薬事制度調査会を設置し、戦後の薬剤師の進むべき方向をまとめ、昭和 21 (1946) 年 1 月に幣原喜重郎内閣の厚生大臣芦田均に建議書として提出していた。¹⁾

しかし、近藤は戦時中に日本薬剤師会会長を務めたことが戦争協力に該当すると判断され、公職追放令を受けたため、昭和 21 (1946) 年 11 月、日本薬剤師会会長を辞任した。昭和 22 (1947) 年 2 月 26 日の総会で慶松勝左衛門が会長に選任された。慶松は前年 7 月に貴族院議員に勅選され、同年 4 月の参議院議員総選挙に全国区から日本自由党公認で立候補して当選した。

ところが、慶松も当選後から 2 ヶ月後の 6 月 24 日、公職追放令を受け、参議院議員の資格を喪失し、日本薬剤師会会長も辞任した。戦時中、同仁会理事を務めたことが公職追放の理由であった。同仁会は明治 36 (1903) 年 2 月、医学界と東亜同文会幹部により設立され、日本の近代医学・薬学を清国・韓国などアジア諸国に普及することを目的とし、薬学者では丹波敬三が理事に就任した。

戦時中、同仁会の事業方針は北支方面の医療宣撫工作に重点が置かれ、医学者の理事は現地に派遣されたが、慶松は一度もその任務に就いたことはなく、医学者の理事は追放を免除されていたので、公職追放は不当な処遇と言わざるをえない。²⁾

GHQ の示唆により日本薬剤師会と日本薬学会の合体の機運が醸成され、両者の折衝が重ねられた結果、昭和 23 (1948) 年 5 月 25 日、日本薬剤師協会の設立総会が開催された。緒方章が仮会長に選任され、日本薬学会は日本薬剤師協会の学術部に改組された。同年 10 月 19 日、日本薬剤師協会第 1 回代議員会が開催され、刈米達夫が会長に選任された。

刈米は明治 26 (1893) 年 8 月大阪市で生まれ、第一高等学校を経て大正 3 (1914) 年 9 月東京帝国大学医科大学薬学科に入学した。在学中は朝比奈泰彦教授の指導を受けた。大正 7 (1918) 年 4 月内務省衛生局の薬用植物栽培試験事務課主任技師に抜擢され、東京衛生試験所の技師も兼任した。

その後、ジャワ、セイロン、欧米各国に出張し、薬用植物の栽培状況の調査を行い、大正 11 (1922) 年 4 月東京衛生試験所薬用植物栽培試験部部長に任じられた。昭

和 15（1940）年 12 月京都帝国大学医学部薬学科無機薬化学講座の初代教授、昭和 16（1941）年 4 月に生薬学講座の初代教授に就任した。³⁾

昭和 24（1949）年 7 月 1 日、日本薬剤師協会の働きかけで米国薬剤師協会会長グレン・ジェンキンスを団長とする使節団が来日し、日本の薬事制度について調査し、医薬分業実施を勧告し、報告書を GHQ 公衆衛生福祉局長のサムス軍医准将に提出した。同年 9 月 13 日、サムス軍医准将は報告書を厚生省、日本医師会、日本歯科医師会、日本薬剤師協会代表に手渡した。

ただし、使節団の報告書草稿とサムス軍医准将が日本側に手渡した報告書の内容に一部修正された項目があった。報告書草稿には「今すぐ医薬分業を実施するのは困難である」と読める 3ヶ条の記述があったが、サムス軍医准将の手により太い鉛筆で消され、最終的にまとまった報告書では「医師の調剤を禁止する」という法律による強制分業の実施になった。

サムス軍医准将が報告書草稿の 3ヶ条を消した理由は「50 年間も解決できない問題だから、日本の手では医薬分業は実施できないのではないか。それなら我々が政治を行っている間に是非実現しなければならない」と決心したからと思われる。⁴⁾

また、医薬分業の即時実施を危惧する声は薬剤師、医師の双方に見られた。日本薬剤師協会前仮会長の緒方章は次のように警鐘を發した。

「今は医薬分業を達成する好機であるが、残念ながら現在の薬局には準備ができていない。分業達成の前提条件のひとつは薬剤師が薬の専門家であることを国民に認知させることである。薬剤師は薬学を学んだが、それに相応しいものを保持しなければ、それは独りよがりの寝言である」

日本医師会副会長の黒沢潤三は「薬剤師は医薬分業実現の夢に陶醉している。緒方博士の薬剤師の資質問題も大事だが、薬剤師自身としては薬局の分布状況や薬局の設備改善などが差し迫った問題だろう。分業は現下の日本では医療の本質、国民の習慣や便・不便の観点から冷静に対処すべき問題である」と批判した。⁵⁾

昭和 25（1950）年 1 月 12 日、サムス軍医准将は三志会（日本医師会、日本歯科医師会、日本薬剤師協会）に医薬分業に対する賛否を決定し、賛成の場合は 3 団体の同意が得られるよう整理することを指示した。しかし、三志会は検討段階に入ると平行線のまま推移し、1 月 28 日の三志会を最後に決裂した。

日本医師会は 2 月 28 日、総会を開催し、「医療の本質として医師が有すべき調剤権を法律を以って禁止或は制限する事に絶対に反対である」と決議し、3 月 30・31 日の両日、代議員会を開催し、会長に田宮猛雄、副会長に榊原亨、武見太郎を選任した。それはサムス軍医准将が推進する医薬分業に対抗するための強力な布陣であった。田宮は東京大学医学部名誉教授、日本医学会会長、榊原は新生日本医師会の設立委員会委員長、武見は吉田茂と縁戚関係にあり、政界と深い繋がりがあった。

3 月に武見はサムス軍医准将に医薬分業に反対する意見書を送り付け、「薬学は医学

に追随する学問となっている」「調剤に必要とされるのは中学程度の物理学の知識である」「医師が医療技術向上につとめる間、薬剤師は店を飾りつけ、客の購買心理を学ぶことに努力を傾ける」と薬学、薬剤師を貶めていた。⁶⁾

4月3日、日本医師会執行部はサムス軍医准将と会談し、日本医師会の意見書として英訳文を提出したが、ここで「誤訳事件」が起きた。サムス軍医准将は日本医師会の第3項「法の精神を生かす」というくだりを「医師と薬剤師が自発的に協力して、法律の定めるところに基づいて分業を進めていく」と解釈し、日本医師会の意見に全面的に賛成を表明した。しかし、医師会の主張は和文では現行法の枠内で任意分業を進めるというものに過ぎず、英訳は誤訳であった。

後日、サムス軍医准将は誤解に気づき、田宮会長に「英文と日本語に差異があることが分かった。自分が全面的に賛成と言明したのは取り消す」という文書を届けた。日本医師会執行部はサムス軍医准将に釈明に訪れたが、同席した厚生省渉外課長の齋田晃は武見が正しいとする英訳は不適當であるとし、改めて正確な英訳を提出した。

しかし、武見は非を一切認めず、5月21日の都道府県医師会長協議会では「弁明をせねばならぬ何物もない」と述べ、正確な英訳を提出した厚生省官僚に責任を押し付けた。サムス軍医准将は日本医師会執行部に対する信頼感を喪失したことを厚生省に伝えたところ、田宮会長が怒り心頭に発して「世が世なら切って捨ててしまう」と言ったので、武見副会長は「やくざのいいがかり」と宥め、7月16日に辞意を表明した。後年、武見はこの「誤訳事件」を「国辱的事件」とし、厚生省官僚を「下劣な非人格者」と呼び、厚生省官僚を嫌悪する最大の理由になったと回顧している。⁷⁾

4月4日、三志会の決裂、日本医師会の分業反対という膠着状態を打破するため、サムス軍医准将は厚生大臣林譲治に医薬分業の実施と医師、歯科医師、薬剤師の報酬を審議する調査会を厚生省に至急設置するよう指示した。7月28日、内閣改造で厚生大臣に就任した黒川武雄は臨時診療報酬調査会と臨時医薬制度調査会を設置し、診療報酬と医薬分業について審議すると発表した。⁸⁾

昭和26(1951)年1月24日、臨時診療報酬調査会は医療報酬を診療報酬と調剤報酬に分ける新医療体系を厚生大臣黒川武雄に答申した。臨時医薬制度調査会の審議は医薬分業実施を巡る日本医師会と日本薬剤師協会の対立で難航したが、2月28日、昭和28年から医薬分業を実施する旨を厚生大臣黒川武雄に答申した。

サムス軍医准将は「両調査会の結論は日本の医療向上の面において画期的なことである」という声明を発表した。⁹⁾ 日本薬剤師協会会長の刈米達夫は臨時医薬制度調査会の答申案が可決された晩、「薬剤師数十人と薬剤師協会幹部は、みぞれの降る中を近くにある三州クラブに引き揚げて祝杯をあげたが、事務員に至るまで皆泣いた。40年にわたる先輩の血のにじむ医薬分業運動の終止符である」と回想している。¹⁰⁾

厚生大臣への答申に基づき、厚生省は直ちに「医師法、歯科医師法及び薬事法の一部を改正する法律」案を作成し、3月6日閣議に提出された。医薬分業法の立法化は

目前に迫っていた。しかし、日本医師会の圧力で閣議は4回に亘り保留となり、ようやく3月20日の閣議で承認され、政府提出法案として第10回国会に提出され、3月30日の衆議院厚生委員会で審議が開始された。

重要法案のため、5月8日に公聴会が開催され、厚生委員会は数回に亘り有識者の意見を聴取した。「雪博士」として名高い中谷宇吉郎（北海道大学教授）は戦前、武見が主治医として中谷の肝臓ジストマ症を完治させたこともあり、「法律による強制分業は反対である」と陳述した。平林たえ子（作家）、清水幾太郎（学習院大学教授）は現行の任意分業を支持し、大内兵衛（法政大学総長）、末高信（早稲田大学教授）は法律による分業に賛成した。

5月16日の厚生委員会では医師に調剤能力について薬学者1人、医学者5人の意見が聴取されたが、村山義温（東京薬科大学学長）が「医学部で行われている調剤学は不十分である」と陳述した以外は児玉桂三（東京大学医学部長）を始めとする医学者全員が「医師に調剤能力はある」と陳述した。5月16日、日本薬剤師協会は神田の共立講堂で総会と医薬分業実施促進大会を併催し、全国から3000人の薬剤師が参加した。5月21日には数千人の薬剤師、薬学生が共立薬科大学運動場から出発し、御成門、浜松町、新橋、虎ノ門付近までデモ行進を行った。

このように国会審議が続き、医薬分業運動が盛り上がる状況の中、サムス軍医准将が突如辞任した。4月11日、米国大統領ハリー・S・トルーマンによって連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥が解任されたことに殉じたためであったが、日本薬剤師協会には晴天の霹靂で日本医師会は欣喜雀躍した。¹¹⁾

サムス軍医准将の辞任によって医薬分業は一挙に暗転した。攻守ところを変えて、後任のC・S・モロハン軍医大佐は日本医師会の要求を受け入れ、政府案は修正され、医師の処方箋発行義務は大幅に緩和された。実施日も2年延期されて昭和30（1955）年1月からとなり、6月5日衆議院本会議で可決され、6月20日「医師法、歯科医師法及び薬事法の一部を改正する法律」（以下、「医薬分業法」）が公布された。

この結果について『薬事日報』は「これでホッとしたのは政府と医師だけで、国民は一向に解っておらず、薬剤師たちは事の以外にただ呆然たるのみ」と薬剤師の落胆を伝え、『日本医事新報』は「修正の結果、強制医薬分業法がほとんど骨抜きになったことは間違いない。魂を抜いて形だけの分業は医師たちの咽喉をいと軽やかに通過する」と逆転の大勝利に凱歌を揚げた。¹²⁾

VI. 薬学科の発展

昭和23（1948）年3月、緒方章教授（臓器薬品化学講座）が停年により東京大学教授を退官した。最後の二代目教授であった。以後、昭和20年代から30年代にかけて三代目教授が日本薬学を牽引し、復興を果たしていく。

緒方教授の後任は伊藤四十二助教授が昇任した。伊藤教授はその名の如く明治42

(1909)年1月、兵庫県に生まれた。昭和3年(1928)4月、東京帝国大学医学部薬学科に入学し、臓器薬品化学教室で緒方章教授の指導を受けた。卒業後は副手を経て、昭和11(1936)年岐阜薬学専門学校教授に就任し、昭和17(1942)年4月、臓器薬品化学講座の助教授として緒方教授の下に復帰した。

緒方は医学部病理学教室と提携して唾液腺ホルモンの研究に着手していたが、伊藤もこれに協力し、唾液腺ホルモンの効力検査法を独自の見解で展開し、病理学教室の試験成績と一致する新知見を得た。伊藤は名誉教授の緒方と共に唾液腺ホルモン研究をさらに発展させ、世界的業績を残した。¹⁾

昭和23(1948)年4月17日、浅野三千三教授(生薬学講座)が戦中から戦後にかけて蓄積した過労により54歳で急逝した。浅野をよく知る後輩の菅澤重彦教授(薬品製造学講座)は「僕は実験の手ほどきを浅野先生にさせていただいたのです。勉強家でもあり温厚な紳士でもあられた浅野先生がもしもう少しご長命であったら、日本の薬学の歴史は変わっていたかもしれない」とその急逝を惜しんだ。²⁾

浅野教授の後任は東京大学立地自然科学研究所の柴田承二助教授が講座担任になった。柴田助教授の祖父は近代日本薬学の創始者の柴田承桂、父は植物学者で東京帝国大学理学部教授の柴田桂太、叔父は化学者で東京帝国大学理学部教授の柴田雄次という学者一家であった。

このような家庭環境で育った柴田助教授は昭和10(1935)年4月、東京帝国大学医学部薬学科に入学した。生薬学教室の朝比奈泰彦教授の指導を受け、地衣バンダイキノリの成分プソロム酸の構造確認で研究を進める中で先人の構造式に誤りがあることに気づき、原料抽出からやり直し、正しい構造式を朝比奈教授に提出した。その結果は朝比奈教授と連名でドイツ化学会誌に掲載された。昭和17(1942)年、生薬学教室の助手となり、昭和19(1944)年、東京大学南方自然科学研究所助教授に昇任した。

昭和23(1948)年9月、宮内府図書頭から正倉院御物中の薬物調査の依頼があり、朝比奈泰彦を代表とする正倉院薬物調査団が組織され、柴田助教授も班員として参加した。昭和25(1950)年2月、教授に昇任し、昭和28(1953)年10月、ロンドン大学衛生熱帯医学研究所のハロルド・レイストリック教授の下でペニシリウム・イスラジクムの色素を研究した。帰国後は社会問題化していたイスランディア黄変米事件の原因菌となった毒成分の構造を解明した。³⁾

秋谷七郎教授(衛生裁判化学講座)は「下山事件」で一躍その名を馳せた。昭和24(1949)年7月5日、国鉄総裁下山定則が出勤途中に失踪し、翌7月6日未明に常磐線北千住駅・綾瀬駅間、東武伊勢崎線との立体交差部ガード下付近で下山の轢死体が発見された。

遺体の司法解剖の指揮を執った東京大学法医学教室の古畑種基教授の依頼で秋谷教授は衛生裁判化学教室の総力を挙げて協力し、下山の上着などに付着した油脂を解明し、pH曲線による死後経過時間の測定などから古畑と共に死後轢断説を主張し、他殺

説の有力な根拠となった。これに対して、慶應義塾大学の中舘久平教授は自殺の根拠となる生体轢断説を主張した。

警視庁内部でも捜査一課は自殺、捜査二課は他殺で見解が対立し、それぞれ独自に捜査が行われたが、公式の捜査結果を発表することなく、昭和 24 (1949) 年 12 月 31 日、捜査本部は解散となり、捜査は打ち切られた。⁴⁾

落合英二教授 (薬化学講座) は戦後も引き続き、芳香環状異項及びキナ塩基の研究に力を注いでいたが、新たな研究テーマとしてアコニット属アルカロイドに着目した。昭和 26 (1951) 年 8 月に岡本敏彦助教授と薬化学教室の教室員と那須の大丸温泉周辺の山岳地帯を調査し、原植物のトリカブトを大量に採集し、岡本助教授たちと連名で「Aconitum-Alkaloide. I」を『薬学雑誌』72 巻 6 号 (1952 年 6 月) に発表した。その後も経ヶ岳、佐渡、下北半島に遠征し、大量の種類のトリカブトを入手し、構造の解明に成功した。⁵⁾

菅澤重彦教授 (薬品製造学講座) は結核の治療薬開発に多大な貢献を果たした。昭和 21 (1946) 年、ストレプトマイシンに続く結核治療薬としてパラアミノサリチル酸 (PAS) がスウェーデンの生化学者 J・レーマン教授に発見されたが、菅澤教授の指導によって昭和 23 (1948) 年 8 月、田辺製薬東京研究所が試供品作成に着手した。

昭和 27 (1952) 年 2 月、結核の特効薬としてイソニコチン酸ヒドラジド (INH) がアメリカで紹介されると日本での発売について問い合わせが厚生省に殺到した。この注目の物質 (INH) を菅澤教授が所有していたため、騒ぎはエスカレートした。⁶⁾

当時、菅澤は医薬品原料の製造法の改良について研究を行っていたが、菅澤教授が指導していた東京薬科大学の亀谷哲治助教授と飯田英夫助手の研究室で既に合成に成功していた。

菅澤教授は「この物質が結核新薬であるとは、全く偶然のことだ」と述べたが、大学には INH を求める手紙が連日寄せられたという。それだけに「今度の結果から日本の科学研究のやり方が医薬品を発見するには、全く不都合なことが伺える」という反省は医学・薬学界に大きな反響を与えた。

しかし、菅澤教授の合成法により田辺製薬東京研究所を始めとする製薬各社は試供薬 INH の製造に取り組み、INH 発見の報から半年後の昭和 27 (1952) 年 7 月に厚生省は薬事審議会の答申を得て、製薬会社に製造販売を許可し、結核の死亡率は大幅に減少した。⁷⁾

石館守三教授 (薬品分析化学講座) は青森中学校在学にハンセン病患者を救う決意を抱き、薬学を志した。太平洋戦争下、石館教授はサルファ剤の結核への応用に携わっていたが、昭和 18 (1943) 年頃、米国の研究でサルファ剤のプロミンが「らい菌」に効くという情報を入手した。石館教授は教室員にプロミンの合成を指示し、終戦直後の昭和 21 (1946) 4 月、「石館プロミン」の合成に成功した。

「石館プロミン」のサンプルは石館教授自身が国立療養所多磨全生園に持ち込み、

臨床試験を依頼した。当初は希望者がいなかったが、やがて中国の戦地から帰国した重症の結節らいの湊一義という青年がプロミンの投与を希望した。1日おきに約60日間の静脈注射をしたところ、失明寸前の視力がかなり回復し、顔面の結節も消失した。プロミンの効果は入院患者の間で評判になり、早く作ってほしいという依頼が殺到したため、昭和23(1948)年に厚生省の認可を受け、吉富製薬がプロミンを製造し、厚生省が一括して買い上げ、入院患者に限り適用することになった。

石館教授は新しい抗がん剤の開発にも貢献した。東北大学医学部病理学教室の吉田富蔵教授はネズミに肝臓がんを発生させ、腹水がんを発見し、「吉田肉腫」と命名した。吉田教授の知見に接し、石館は共同研究を申し入れたが、当時がんの化学療法剤に手を出すことは一種の野心家としか考えない風潮があり、吉田教授は容易に同意しなかった。

しかし、がん研究の究極の目的は不幸な難病の克服であることに意気投合し、共同研究が開始された。そして、「ナイトロミン」を開発し、昭和27(1952)年に吉富製薬から抗がん化学療法剤として発売された。⁸⁾

昭和24(1949)年7月、米国薬剤師協会使節団が来日し、薬学教育を薬剤師の業務に適するよう勧告し、調剤学の重要性が指摘された。さらに、戦後は欧米から画期的な新薬が次々に紹介され、製剤学の研究が急務になっていた。

こうした状況を背景に昭和26(1951)年7月、薬学科で7番目の講座として製剤学講座が開設され、野上寿が附属病院薬局長兼任で初代教授に就任した。野上教授は昭和9(1923)年3月、東京帝国大学医学部薬学科を卒業し、生薬学教室の助手を経て昭和17(1942)年2月、大阪帝国大学医学部附属病院薬局長に就任した。

昭和23(1948)年3月、畑忠三の停年に伴い、東京大学医学部助教授兼附属病院薬局長に転じた。当初、製剤学講座は教授一人で人員、研究室もなく、附属病院薬局研究室を併用し、薬局助手の協力を仰ぐ状態であった。昭和27(1952)年11月、附属病院薬局助手の長谷川淳が助教授に昇任したが、助手は附属病院薬局助手が代行する不完全講座であった。

昭和31(1956)年9月、野上の英断により東京大学医学部附属病院は1回7日以上の調剤を行う場合に希望者に院外処方箋を発行する措置を取った。同年4月1日から「医薬分業法」が施行されたが、医師の調剤権が認められていたので、この措置は開局薬剤師にとって一筋の希望となった。⁹⁾

昭和29(1954)年9月、臓器薬品化学講座から薬理学を分離し、薬学科8番目の講座として薬品作用学講座が開設され、熊谷洋教授(医学部薬理学講座)の併任で発足した。臓器薬品化学講座は生理化学講座と改称され、伊藤四十二教授と助手1名の不完全講座が続いたが、昭和33(1958)年1月鶴藤丞助教授と助手3名が任命され、完全講座となった。

昭和32(1957)年11月、高木敬次郎助教授(生理化学講座)が薬品作用学講座の

教授に昇任した。高木教授は昭和 11 年（1936）4 月、東京帝国大学医学部薬学科に入学し、臓器薬品化学教室で緒方章教授の指導を受けた。昭和 15（1940）年 2 月、臓器薬品化学教室の助手になり、有効成分不明な動物成分（解熱剤の地龍、鎮痛剤の赤とんぼなど）の成分研究を行い、赤とんぼの黒焼きに鎮痙作用が認められるという新発見を得た。イナゴでも同様の結果であった。

昭和 23（1948）年 3 月、緒方教授が停年により退官し、伊藤助教授が後任教授に昇任し、高木も助教授に昇任した。昭和 29（1954）年 1 月、結核による療養生活を余儀なくされたが、健康を取り戻し、昭和 30（1955）年 9 月に復帰した。¹⁰⁾

VII. 戦後の二代目教授

戦後も慶松勝左衛門、近藤平三郎、朝比奈泰彦、緒方章の二代目教授は薬学界の長老として薬学研究・教育の充実、薬事制度改革に多大な尽力を果たした。

慶松勝左衛門は昭和 21（1946）年 7 月、貴族院議員に勅選され、同年 11 月に近藤平三郎が公職追放令を受けたため、昭和 22（1947）年 2 月 26 日の日本薬剤師会総会で会長に選任された。同年 4 月の参議院議員総選挙に全国区から日本自由党公認で立候補して当選した。

ところが、慶松も当選後から 2 ヶ月後の 6 月 24 日、公職追放令を受け、参議院議員の資格を喪失し、日本薬剤師会会長も辞任した。戦時中、同仁会理事を務めたことが公職追放の理由であったが、愛弟子の菅澤重彦は慶松の公職追放について憤慨を込めて以下のとおり述べている。

「先生にとっては誠に晴天の霹靂を聞くの思いで、先生の近親及び私共も、全力を挙げてその筋に追放の不当なるを陳情し続けたが、すべての努力は徒労に終わった。戦争大反対者であられた先生としては、さぞかし無念きわまりなきことで、一時はまったく茫然自失といった姿であられた」¹⁾

昭和 26（1951）年 5 月、行き過ぎた占領政策の見直しの一環として公職追放の基準が緩和された。同年 8 月、慶松の公職追放は解除されたが「医系の同仁会理事は追放を免除されたにも拘らず、慶松博士のみ不当な処遇を受けたことに対する精神的打撃が、健康にも影響を及ぼしたことは否めない」ことであり、慶松は昭和 25（1950）年 12 月、前立腺肥大症で東京通信病院に入院していた。²⁾

昭和 26（1951）年 6 月「医薬分業法」が制定されたので、刈米達夫は日本薬剤師協会会長を退任し、昭和 27（1952）年 4 月 26 日の日本薬剤師協会代議員会で慶松は衆望を担って会長に選任され、会長就任の挨拶で難局に対する会員の奮起を促した。

昭和 30（1955）年 1 月から「医薬分業法」は実施されるはずであったが、日本医師会は分業を阻止するため、審議会の設置を阻止し、国会議員に働きかけて実施の無期延期を図るなど妨害活動は日増しに露骨になっていった。³⁾

慶松はこれに強い危機感を抱き、昭和 27（1952）年 11 月医薬分業実施期成同盟を

結成した。そして、病軀を押して会長の重責を果たすため、薬学大会、各種会合に出席し、「不眠症や排尿障害の不快な自覚症状に耐えながら、健康人も及ばぬ目ざましい活動は周囲の驚嘆の的であった」という。⁴⁾

昭和 29 (1954) 年 1 月 20 日、慶松は前立腺腫瘍手術のため、東京逋信病院に入院した。1 月 25 日、慶松の悲壮な姿を黙視しえず、東京帝国大学医科大学薬学科以来の盟友である近藤平三郎、朝比奈泰彦、緒方章の名誉教授は医薬分業に関心を示さない薬友会会員に慶松への援護を呼びかけた。薬友会は大正 12 (1923) 年 4 月に慶松が設立した東京帝国大学医学部薬学科の同窓会で慶松は初代会頭を務めた。

朝比奈は慶松に「老友が病軀にめげず分業戦に奮闘する姿を傍観するに忍びず、援護したい」という心情を込めた手簡を送り、病床で手にした慶松は感涙に咽んだ。しかし、時すでに遅く、それから 3 日後の 1 月 28 日前立腺癌のために会長在任中、78 歳で逝去した。⁵⁾

周到な企画力と旺盛な実行力で近代日本薬学の発展に多大な貢献を果たした生涯で、その稀有な政治力は積極果敢な人柄と相俟って薬学界では希少価値を有した。その逝去は多方面から惜しまれ、葬儀委員長を務めた近藤平三郎は哀惜の念をもって「お互に性格はまったく相反するのに喧嘩もせず、半世紀以上の間、薬学興隆の使命に協和して来た彼の死は悼まずにはいられなかった」と述べている。⁶⁾

近藤平三郎は戦後も引き続き日本薬剤師会会長を務め、終戦直後の昭和 20 (1945) 年 9 月 22 日の日本薬剤師会理事会で薬事制度調査会を設置し、戦後の薬剤師の進むべき方向をまとめ、昭和 21 (1946) 年 1 月に幣原喜重郎内閣の厚生大臣芦田均に建議書として提出した。しかし、戦時中に日本薬剤師会会長を務めたことが戦争協力に該当すると判断され、公職追放令を受けたため、昭和 21 (1946) 年 11 月、日本薬剤師会会長を辞任した。

昭和 27 (1951) 年 4 月、サンフランシスコ平和条約が発効し、GHQ による占領は終焉し、日本の独立が果たされた。近藤の公職追放は解除され、乙卯研究所で医薬品の開発研究と後進の指導育成に当たった。

乙卯研究所は大正 4 (1915) 年 6 月、塩野義三郎商店の援助を受けて開設した研究所である。近藤は当時のことを以下のとおりに述懐しているが、後進の指導育成に情熱を傾注した近藤の思いを余すことなく伝えている。

「落ち着いた雰囲気の中で、研究の妙味を堪能している連中に囲まれ、私も大変気が楽であった。」「めいめい技能や学位を身につけ、欣然と乙研の門を出て行く人たちへ、露台から祝福を送る心温まる情緒は人生のオアシスだ。化学という媒体を通して心と心のふれ合う交流が、血の通う親近感を抱かせるのであろうか。」⁷⁾

昭和 28 (1953) 年 10 月、日本学士院会員となり、同年 11 月には喜寿祝賀に際し、藤園会により『近藤平三郎アルカロイド研究の回顧』が刊行された。「藤園」は近藤の藤にちなみ「薬化学の花を咲かせた園」の意味で東京帝国大学退官に際し、門下生

の発起で藤園会という親睦の集いが生まれていた。昭和 33（1958）年 11 月、文化勲章を受章した。

昭和 38（1963）年 1 月 8 日、愛弟子の落合英二が薬学者として初めて講書始で「アルカロイドについて」を昭和天皇にご進講した。アルカロイドは近藤平三郎の畢生の研究テーマであった。それから 10 ヶ月後の 11 月 17 日、近藤は愛弟子の大成を見届けるかのように 85 歳で逝去した。⁸⁾

近代日本薬学の発展の柱石として不朽の足跡を遺した生涯でその温かな微笑と端正な偉容は多くの人々を魅了し、数多の門下生を輩出した。

朝比奈泰彦は戦後もひたむきに研究一筋の道を歩んだ。昭和 23（1948）年 9 月、宮内府図書頭から正倉院御物中の薬物調査の依頼があり、朝比奈を代表とする正倉院薬物調査団が構成された。

天平勝宝 8 歳（756 年）、聖武天皇崩御七七忌に際し、光明皇太后は紫微中台（皇太后職）の中衛大将の藤原仲麻呂と計って、先帝遺愛の品々約 700 点余を東大寺盧舎那佛（大仏）に献納し、それらは全て正倉院宝庫に納入された。この中に 60 点の薬物があった。その調査結果は朝比奈泰彦編『正倉院薬物』として昭和 30（1955）年 12 月刊行された。⁹⁾

昭和 26（1951）年、植物学者の牧野富太郎が自宅に保管していた標本約 50 万点を整理する「牧野博士標本保存委員会」を組織し、国庫補助金を得て整理を行った。朝比奈は東京府尋常中学校在学中、理科担当の教諭帰山信順の薫陶を受け、帰山の紹介で牧野と出会い、牧野の逝去まで 60 年に亘る交流を結んだ。¹⁰⁾

地衣採集にも意欲的に取り組み、古希を迎えた昭和 26（1951）年 7 月に八ヶ岳の最高峰赤岳を踏破した。その後も阿寒国立公園、乗鞍岳、伊豆半島、湯殿山、富士五湖、白馬岳、八幡平、甲州金峰山など全国各地を調査した。

昭和 26（1951）年と昭和 27（1952）年にノーベル化学賞の候補に挙げたが、受賞を逸した。昭和 29（1954）年 10 月、日本薬史学会を創立し、初代会長に就任した。その創立趣意書には「歴史をたずねることは単なる趣味の問題ではない」「うずもれた古来の薬学の宝を探り、新たなる発展に資したい」と述べられ、最初の「非実験系」分野である薬史学を学問の領域に高める意欲と熱意が込められていた。¹¹⁾

昭和 32（1957）年 10 月には喜寿祝賀に際し『朝比奈泰彦及協力者報文集・化学の部続編』が刊行された。昭和 50（1975）年 6 月 30 日、94 歳で逝去したが、日本薬学を世界的水準に引き上げることを理想に掲げ、その実現に邁進した生涯であった。

愛弟子の石館守三はその師恩に満腔の謝意を込め、「もし私が先生に出会わなかったら、自然に学ぶ情操と学問に対する厳粛さを本当に学ぶことが出来なかったろうし、今の自分というものが大きく変わっていたと思わざるを得ない」と述べている。¹²⁾

朝比奈は服装には極めて無頓着で初めて会う人々にはよく学校の小使さんと間違えられたという。「地衣 Lichen」の音を表す蕾軒と号した朝比奈は最終講義で「人生

と業績はその人によってのみ創造される芸術品である」という言葉を残した。

最後の二代目教授の緒方章は昭和 23（1948）年 3 月、停年により東京大学教授を退官した。昭和 22（1947）年 4 月から昭和 24（1949）年 3 月まで日本薬学会会頭を務めた。昭和 29（1954）年 1 月 28 日、慶松勝左衛門が日本薬剤師協会会長在任中に逝去したため、同年 2 月 25 日の日本薬剤師協会代議員会で緒方は後任の会長に選任された。

この時期は昭和 30（1955）年 1 月から実施予定の医薬分業直前で処方箋発行の除外規定、薬局の普及が十分でない地域などについて早急に審議すべき課題が残されていたが、厚生省の動きは鈍かった。

これらを審議する医薬関係審議会は昭和 29（1954）年 6 月によりやく始まったが、医薬分業に反対する日本医師会委員は諮問事項と関わりのない質疑を長時間行うなど議事は遅々として進まなかった。8 月 29 日の第 9 回総会で緒方は議事進行を求めて日本医師会の態度を批判する以下の爆弾発言を行った。

「「日医」は初めから強制分業に反対なのだから委員にならない方がよかったですのではないか。諮問に対しできるだけ建設的意見を出し、諮問に答えてほしい。分業に反対なら他の所で叩き潰せばよい。議事進行を希望する」

温厚な緒方のやむにやまれぬ発言であったが、9 月 1 日の第 10 回総会で日本医師会委員は緒方に謝罪を求め、緒方がこれを突っぱねると騒然となり、日本医師会委員は退場した。

9 月 8 日の第 11 回総会で緒方は議事が進行しないので陳謝したが、緒方発言は日本医師会側の引き延ばし作戦に利用され、諮問事項に答えられないまま時間切れになり、審議会も廃止された。

そして、12 月 8 日の第 20 回国会で医薬分業を 1 年 3 ヶ月延期する「医薬分業法」改正案が成立した。緒方は「筋の通らぬ政治が横行する現状では、日薬会長は政治家でなければならない」と義憤の言葉を残し、同年 12 月 17 日の日本薬剤師協会全体理事会で会長を辞任した。在任 10 ヶ月足らずであった。その後も厚生省中央審議会会長、日本公定書協会理事長などの要職を歴任し、昭和 53（1978）年 8 月 22 日、90 歳で逝去した。

緒方の祖父は幕末の蘭方医として名高い緒方洪庵、父は陸軍軍医学舎長兼近衛軍医長を務め、緒方病院を開設した緒方惟準、兄は東京帝国大学医学部教授の緒方知三郎、母方の祖父も幕末の蘭方医として高名な佐藤泰然という医者の家系であった。¹³⁾

このような家庭環境で育った緒方は温容溢れる人柄で実験指導では自ら試験管、フラスコを取って実演し、その真髓を示した。その自伝『一粒の麦』『一粒の麦 大正の巻』は明治・大正期の親友、恩師との交友を叙情溢れる静謐な筆致で回顧し、当時の第三高等学校、東京帝国大学、本郷界隈の情景を詩情豊かに描いた名品である。

VIII. 東京大学薬学部創立

昭和 24 (1949) 年 5 月、新制東京大学が発足した時点では薬学科は 6 講座であったが、昭和 32 (1957) 年には 8 講座になった。明治以来、薬学科は医学部内で従属的地位に置かれ、このままでは薬学の進歩発展は望めないのが、東京大学医学部から独立し、薬学部を創立する機運が醸成されていった。これについて、名誉教授の緒方章は次のように語っている。

「薬学部が独立することに僕は不賛成であった。しかし、歴史的には医学部は薬学科を継子扱いにしてきた。薬学科は医科大学の便所だと青山胤通先生程の方が言ったそうです。つまり、薬学が付いているのが厄介でない方がさっぱりするという考え方に対する不満が別れた主因になっていると思います」¹⁾

柴田承二教授（生薬学講座）も次のように回顧している。

「人員の増加、設備の充実にも係らず建物は旧態依然で狭隘、旧式不便かつ健康保健上からも問題が多かった。しかも改築改善の予算要求をしても医学部内の他の緊急予算順位の常に下位にあつて中々実現の見込みが立たない状況であった。既に 6 講座の小学部教育学部が赤門脇に新建築を実現していたから薬学部独立の可能性とその利益が期待できると考えられた」²⁾

医学部からの独立は薬学科主任教授の石館守三（薬品分析化学講座）がその決断力と指導力で主導した。薬学科内では医学部からの独立を巡って激しい対立があった。落合英二教授（薬化学講座）は「医学者との付き合いがなくなって薬学の将来に禍根を残すことになるから自分はいくまで反対である。このことを記録に残してくれ」と発言した。³⁾ 菅澤重彦教授（薬品製造学講座）、秋谷七郎教授（衛生裁判化学講座）も学部への転換は大反対であった。⁴⁾

これに対して石館教授は「その気さえあれば学部が分かれても共同研究はできる。それより少数意見を予算に実現するためには学部として独立するしかない」と説き、多数決で薬学科の意見をまとめた。

昭和 32 (1957) 年 4 月、石館教授は東京大学総長矢内原忠雄に薬学科の意向を伝え、協賛を得た。事前に石館教授は米国の教育事情の視察に行く矢内原総長に「先生がアメリカへ行かれるなら、ぜひ薬学が独立しているかいなか見て下さい」と依頼し、矢内原総長は米国で薬科大学、薬学部の独立、医科との分離の実際を観察し、薬学部の独立に強い理解を示すようになっていた。

その一方、石館教授は文部省大学課長の意向を打診し、大学から申請があれば承認するという言質を得ていた。そこで、医学部長小林芳人の了解のもとに医学部教授会が開催され、多数決で薬学科分離の同意を得た。すでに予算申請の時期が迫っていたので、矢内原総長の計らいで臨時学部長会を招集し、薬学部設立の件が表決され、評議会の決議を得る時間的余裕がないので、矢内原総長から直接文部省大学課長に薬学部設置申請が提出された。⁵⁾

昭和 33（1958）年 3 月 31 日発令の法律第 28 号をもって国立学校設置法が改正され、東京大学薬学部が創設された。明治 6 年（1873）7 月の第一大学区医学校製薬学科設立から 85 年の長い道のりを経て医学部所属の前史に終止符が打たれ、薬学部の新たな歴史の一頁が開かれたのである。

昭和 33（1958）年 4 月 1 日、薬学科は医学部から分離し、以下の 8 講座で薬学部薬学科が発足した。

第一講座（衛生裁判化学） 浮田忠之進教授 奥井誠一助教授

第二講座（薬化学） 落合英二教授 岡本敏彦助教授

第三講座（生薬学） 柴田承二教授 藤田路一助教授

薬品製造学講座 菅澤重彦教授 赤星三弥助教授

生理化学講座 伊藤四十二教授 鶴藤丞助教授

薬品分析化学講座 石館守三教授 田村善蔵助教授

製剤学講座 野上寿教授 長谷川淳助教授

薬品作用学講座 高木敬次郎教授 粕谷豊助教授

薬学部の創立後、初代学部長の選挙が行われたが、ここで一波乱があった。最高得票は伊藤四十二教授（生理化学講座）で石館教授は一票差の次点であったが、いずれも 3 分の 2 に達しなかった。そこで決選投票に持ち込まれ、石館教授が一票差で初代学部長に選ばれた。⁶⁾

IX. 三代目教授の事績

戦中から戦後にかけて日本薬学の復興を果たした三代目教授も昭和 30 年代から 40 年代にかけて停年により退官したが、退官後も薬学研究・教育、薬事制度、製薬産業の各分野で多大な尽力を果たし、不朽の足跡を残した。

「下山事件」の鑑定で一躍その名を馳せた秋谷七郎教授（衛生裁判化学講座）は薬学部創立前年の昭和 32（1957）年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は東京医科歯科大学医学部附属総合法医学研究施設長、昭和大学薬学部教授、中央薬事審議会委員長など要職を歴任した。

昭和 53（1978）年 8 月 11 日、82 歳で逝去したが、科学捜査研究所顧問として幾多の刑事事件の鑑定を手がけ、鑑定技術の体系的基礎を確立し、鑑識方面で活躍する数多くの優れた人材を育成した功績は大きい。¹⁾

菅澤重彦教授（薬品製造学講座）は昭和 34（1959）年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は田辺製薬の顧問に就任し、抗感染症薬サルファメラジンの新合成法を開発し、抗ヒスタミン剤の改良合成、新気管支拡張剤の合成、難溶性止血剤の可溶化に貢献し、同社の有機化学研究所で若い研究者の製薬指導に当たった。平成 3（1991）年 3 月 3 日、93 歳で逝去した。²⁾

長身瘦軀で英国紳士の菅澤はいつも端正な姿勢で簡明直截、立板に水のような淀みない講義で学生を魅了した。酒を嗜まず、大の甘党でゴルフを愛好し、明朗闊達な人柄で多くの門下生に慕われた。

門下生の一丁田健一（日研化学専務取締役）は「先生を囲んでの門下生のゴルフコンペを持ったら、どんなに楽しいことでしょう。その機会を切に待望しております」と述べている。³⁾ 晩年、ゴルフを止め、内外の化学の新着雑誌に親しく目を通す姿は責任を重んじる明治人の風格があった。

落合英二教授（薬科学講座）は昭和 34（1959）年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は近藤平三郎が理事長を務める乙卯研究所所長に就任し、『長井長義傳』の編纂委員長を委嘱された。昭和 35（1960）年 2 月、日本薬学会創立 80 周年記念事業をして金尾清造著、長井長義傳編纂委員会及び長井長義先生顕彰会編纂によって『長井長義』が刊行された。

昭和 38（1963）年 1 月 8 日、薬学者として初めて講書始で「アルカロイドについて」を昭和天皇にご進講した。アルカロイドは近藤平三郎の畢生の研究テーマであり、落合は近藤を学問のみならず人生の師として深く敬愛し、師弟の清廉な情誼は終生変わらなかった。

それから 10 ヶ月後の 11 月 17 日、近藤は愛弟子の大成を見届けるかのように 85 歳で逝去し、乙卯研究所と日本薬学会の合同葬儀が厳粛に執り行われた。落合は葬儀委員長として近藤の偉功を偲び、乙卯研究所理事長を継承した。昭和 44（1966）年 4 月、文化勲章を受章した。薬学分野では朝比奈泰彦、近藤平三郎に続く 3 人目の受賞であった。

昭和 47（1972）年 2 月竣工した日本薬学会長井記念館の建設委員長として多大な尽力を果たし、館内入口正面の銘板に「長井記念館由来之記－落合英二文、金尾清造書」として銘文を謹記した。しかし、この時には持病の輪胆管閉塞症が再発しており、昭和 49（1974）年 11 月 4 日、76 歳で逝去した。

厳格な研究態度と実験第一主義を貫いた落合とその協力者による研究は論文 526 報と著書 8 編に達し、日本の薬化学を世界的水準に引き上げ、多くの優れた研究者を育成した。⁴⁾ 直截で野人的な人柄は学生を魅了し、門下生の岩井一成（三共株式会社取締役製品計画部長）は落合のことを「人間として温かく清潔な生きざまを貫かれ、われわれの師表でした」と回顧している。⁵⁾

初代薬学部長を務めた石館守三教授（薬品分析化学講座）は昭和 36（1961）年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後も日本キリスト教海外医療協力会長、共立薬科大学理事長、国立衛生試験所所長、薬事審議会会長、笹川記念保健協力財団理事長などの要職を歴任した。その間、スモン病の原因と考えられていた整腸薬キノホルムの販売使用禁止、水銀を含む医薬品、化粧品製造禁止を答申し、薬害の防止に多大な尽力を果たした。

昭和 45 (1970) 年 12 月、石館は日本薬剤師会会長に就任した。薬種商の後継を期待していた父への恩返しと日本の薬剤師のおかれている現状に思いを致し、周囲の反対を押し切って就任した。恩師朝比奈泰彦は「心残りは薬剤師会の手伝いができなかったことだ。何か手伝うことがあるなら、何でもしてやる」と温かく激励した。

昭和 57 (1982) 3 月に退任するまで 11 年 4 ヶ月間会長を務めたが、最大の功績は薬剤師の宿願であった医薬分業を軌道に乗せたことである。歴代の厚生大臣と個別の会談を重ね、分業推進を要望し、日本医師会会長武見太郎と信頼関係を構築した。その結果、昭和 49 (1974) 年 10 月から診療報酬改定され、処方箋料が大幅に引き上げられ、「医薬分業元年」を迎えることになった。⁶⁾

平成 5 (1993) 年 11 月、石館は久しぶりに全生園を訪れ、コスモスの咲く庭で最初にプロミンを使用した湊一義と再会を果たした。あの日から 50 年の歳月が流れ、石館は 92 歳、湊は 80 歳になっていた。石館は湊の手を握りながら「よく効いてくれて、うれしかったなあ」と感無量の思いで呟いた。⁷⁾

平成 8 (1996) 年 7 月 18 日、高円寺の自宅で 95 歳の天寿を全うした。石館は回想録『はまなすのこみち』で「人は目に見えない大きな摂理に行き、生かされていると思わざるを得ない」と述べている。⁸⁾ 若き日に同志会で学んだ「神と人との仕える」が石館の人生の指針であり、数多の人々がその温かい光によって救われた。日本薬学界の気高き名峰として不朽の足跡を残した生涯であった。

石館守三に続き、第二代薬学部長を務めた伊藤四十二教授（生理化学講座）は昭和 44 (1969) 年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は静岡薬科大学学長に就任し、教育方針として教養・専門の両課程を教育の両輪とし、専門課程では「薬品化学分野」「生物薬学分野」「医療薬学分野」「薬品工学」の 4 コース制を実現した。また、日本薬学会会頭、文部省大学設置審議会会長の要職を歴任した。⁹⁾

特筆すべきは研究・教育における図書館の果たすべき役割を重視したことである。薬学の将来のためには図書館の充実整備が最も重要であると考え、伊藤の呼びかけで昭和 30 (1955) 年 4 月、日本薬学図書館協議会が設立され、初代理事長に就任した。

昭和 39 (1964) 年 1 月、東京大学附属図書館の改革に渾身の力を傾注した岸本英夫館長が急逝した。伊藤は後任の附属図書館長として「岸本改革」で知られる岸本の遺志を継ぎ、総合図書館と部局図書館との連携・協力、指定書制度を充実させた。「研究の裏方を務めている図書館員の類いまれな理解者」である伊藤は館員の研究・研修に対する周囲の理解を増すことに尽力し、機会ある度に館員の資質向上を説いた。¹⁰⁾

静岡薬科大学学長在任中の昭和 51 (1976) 年 6 月 9 日、悪性リンパ腫のため 67 歳で急逝し、多方面に強い衝撃を与えた。

鶴藤丞（東北大学薬学部教授）は「伊藤四十二先生はリベラリストだった。部下や弟子達に向けて、およそやかましいことは一つも言われなかった。数多い弟子のなかで、一度でも先生から叱責されたことのある人はおそらく一人もいないのではな

いかと思う。われわれ弟子共に対しては一人一人の持ち味を認めて最大限に勇気づけて下さるような、不思議な魅力のある先生だった」「先生はアルコールにかけては仲々の強豪で、研究室の旅行のときなど弟子共はいかにして先生を攻め落とすかに腐心したものであった。あるときは、さすがの先生も遂に押入れの中へ雲がくれされ、それをさがし出してはまた盃を重ねるといようなこともあった」と伊藤の人となりと在りし日の思い出を偲んだ。¹¹⁾

馬場重徳（図書館短期大学教授）は伊藤への満腔の謝意と哀惜の念を込めて「先生は心から実行の方であった。理想を秘め、同じ心に燃える人に活動の場を備え供し、あるいは不案内な心に火を自燃させ、一つの火勢に整合させて行くような心の暖かい配慮深い賢明な折目正しい方であった」とその逝去を悼んだ。¹²⁾

石館守三、伊藤四十二に続き、第三代薬学部長を務めた野上寿教授（製剤学講座）は昭和46（1971）年3月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は日本薬剤師会副会長、日本薬学会会頭を務めた。

昭和61（1986）年から日本薬史学会会長に就任し、様々な発展策を打ち出した。会員の学位取得を支援し、会員増強のために評議員会を新設し、財政基盤を強化するために賛助会員の増加を積極的に遂行した。

日本薬学会年会から薬史学部会を独立させ、昭和62（1987）年10月、明治薬科大学（世田谷校）に「薬史学文庫」を開設した。しかし、会長在任中の平成2（1990）年10月10日、80歳で急逝した。¹³⁾

その研究分野は錠剤、粉末剤の特性及び薬物の物理化学的性質と薬理効果の研究、薬剤の皮膚、粘膜、消化管よりの吸収機構の研究、薬剤の分解とその安定化の化学反応速度論的研究など広範囲に及んだ。研究論文数は100余編に達し、日本の製剤学、薬剤学を発芽、発展させ、薬剤学の体系化を構築した。「無」の状態から日本の薬剤学を創始したその生涯は不朽の足跡であった。¹⁴⁾

柴田承二教授（生薬学講座）は昭和51（1976）年3月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は明治薬科大学で10年間、若い研究者を育成した。昭和61（1986）年10月から20年間『植物研究雑誌』の編集長、平成3（1991）年から14年間日本薬史学会会長を務めた。

平成6（1994）年、宮内庁の委嘱で正倉院薬物の第二次調査団が組織され、柴田は団長として正倉院宝庫の中で生薬の鑑定・同定を行い、その調査結果は『図説正倉院薬物』（柴田承二監修）として平成12（2000）年12月刊行された。平成9（1997）年文化功労者に顕彰され、平成28（2016）年7月12日、101歳の天寿を全うした。¹⁵⁾

自伝『薬学研究余録』は昭和・平成期の日本薬学史の貴重な資料である。柴田は絵画、音楽に造詣が深く、明治薬科大学では昼休みにテニスを楽しみ、研究室の旅行先はテニスコートがある場所を選び、夜は学生と酒を飲みながら談笑した。研究指導は厳格であったが、研究を離れるとももの静かですらいつも微笑んでいたという。¹⁶⁾

高木敬次郎教授（薬品作用学講座）は昭和 51（1976）年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は東京理科大学薬学部教授、同薬学部長を務めた。

昭和 57（1982）年 4 月、高木は日本薬剤師会会長石館守三の強い懇請を受け、後任の会長に就任し、平成 6（1994）年 3 月まで 12 年間に亘り会長を務めた。高木は医薬分業の質を高めることが不可欠であると判断し、処方箋の監査から薬剤の交付、服薬指導、薬歴の作成・活用までの一貫する流れの中で患者が医薬分業のメリットを実感できるかがポイントであると薬剤師に訴え続けた。

また、医療機関を限定せずに広く処方箋を受け付ける面分業（かかりつけ薬局）の実現に取り組んだ。柴田承二の門下生で参議院議員の石井道子が政治生命を賭けてめざした「薬剤師を医療の担い手」を医療法第一条に記載させることにも全面的に協力し、平成 4（1992）年 6 月の医療法改正で実現した。

明治期の下山順一郎以来、丹波敬三、丹羽藤吉郎、近藤平三郎、慶松勝左衛門、緒方章、石館守三と日本薬剤師協会会長の大半は東京帝国大学及び東京大学教授経験者であったが、高木をもって終わりを告げた。¹⁷⁾

「若い頃から“好々爺”の風貌で、現状の不満を述べられることはあまりなく、常にポジティブで前向の発想であった」と評された高木は亡くなる前日も普段どおりに食事をし、平成 30（2018）年 1 月 29 日、102 歳の天寿を全うした。¹⁸⁾

おわりに

東京大学薬学系研究科・薬学部の源流は明治 6（1873）年 7 月に新設された第一大学区医学校製薬学科に遡る。爾来、85 年の長い歳月を経て昭和 33（1958）年 4 月、東京大学医学部から独立し、医学部所属の前史に終止符が打たれ、新たな歴史の一頁が開かれた。

初代教授の柴田承桂、下山順一郎、丹波敬三、長井長義、丹羽藤吉郎はドイツ留学で習得した学識に基づき、真摯な努力を傾注し、明治期に創始者として近代日本薬学の黎明期を築き上げた。

二代目教授の朝比奈泰彦、近藤平三郎、慶松勝左衛門、服部健三、緒方章は留学で習得した最新の学問を導入し、研究分野の領域を拡大し、大正から昭和 10 年代にかけて近代日本薬学の発展に多大な尽力を果たした。

そして、三代目教授の菅澤重彦、落合英二、石館守三、秋谷七郎、浅野三千三、伊藤四十二、柴田承二、野上寿、高木敬次郎は戦中から戦後にかけて日本薬学の復興を果たし、念願の東京大学薬学部創立を実現したのであった。

戦後も 80 年が経過し、明治・大正は遙か彼方の遠景となり、昭和は終焉し、平成は過ぎ去り、令和の世を迎えた。しかし、去り行く時の流れにも消しえぬ一筋の足跡がある。近代日本薬学の三代に亘る長く険しく困難な道のりをひたむきに歩み、真摯な努力がもたらした数々の事績は不朽の価値を有するものである。

注

I. 三代目教授への継承

- 1) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科：人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p.130-131
- 2) 同上 p.85-87
- 3) 西川隆『くすりの社会誌 人物と時事で読む33話』薬事日報社 2010年2月 p.113-114
- 4) 根本曾代子『日本の薬学：東京大学薬学部前史』南山堂 1981年7月 p.211, 268
- 5) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科：人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p.179-180
- 6) 根本曾代子『日本の薬学：東京大学薬学部前史』南山堂 1981年7月 p.262
- 7) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科：人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p.140-141
- 8) 根本曾代子『日本の薬学：東京大学薬学部前史』南山堂 1981年7月 p.271
- 9) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科：人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p.108-111

II. 戦時下の薬学科

- 1) 根本曾代子『日本の薬学：東京大学薬学部前史』南山堂 1981年7月 p.279-280
- 2) 上遠章「DDT、BHC、パラチオソが世に出るまで」『日本農薬学会誌 学会設立記念号』1975年12月 p.21
- 3) 秋谷七郎、本橋信夫「有機酸摂取による尿成分の変化について（第1報）有機酸摂取が尿pH値及び乳酸量に及ぼす影響について」『薬学雑誌』76（2）1956年2月 p.111-115
- 4) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科：人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p.140
- 5) 稲垣晴彦『碧素 国産ペニシリン開発の旗振り 稲垣軍医少佐と一高生学徒動員』日経事業出版センター 2005年9月 p.208-212, 215
- 6) 角田房子『碧素・日本ペニシリン物語』新潮社 1978年7月 p.42
- 7) 西川隆『くすりの社会誌 人物と時事で読む33話』薬事日報社 2010年2月 p.131-134
- 8) 根本曾代子『慶松勝左衛門傳』廣川書店 1974年7月 p.224-231
- 9) 西川隆『くすりの社会誌 人物と時事で読む33話』薬事日報社 2010年2月 p.113-114

- 10) 根本曾代子『慶松勝左衛門傳』廣川書店 1974年7月 p.235-236
- 11) 「慶松勝左衛門教授の喜寿を記念して」『薬学雑誌』72(9) 1952年9月 p.1073
- 12) 根本曾代子『慶松勝左衛門傳』廣川書店 1974年7月 p.241, 245-246
- 13) 近藤平三郎；根本曾代子編『藤園回想』廣川書店 1964年2月 p.250
- 14) 西川隆『くすりの社会誌 人物と時事で読む33話』薬事日報社 2010年2月 p.161
- 15) 根本曾代子『朝比奈泰彦傳』廣川書店 1966年1月 p.277-280
- 16) 同上 p.368

Ⅲ. 焦土からの復興

- 1) 根本曾代子『日本の薬学：東京大学薬学部前史』南山堂 1981年7月 p.282-284
- 2) 西川隆「製薬産業の歴史 黎明期から国際化時代の今日まで」『薬学史事典』薬事日報社 2016年3月 p.89-91
- 3) 西川隆『くすりの社会誌 人物と時事で読む33話』薬事日報社 2010年2月 p.139-140
- 4) 谷岡忠二『日本薬剤師会史』日本薬剤師会 1973年10月 p.596
- 5) 西川隆『「くすり」から見た日本一昭和20年代の原風景と今』薬事日報社 2004年1月 p.101
- 6) 同上 p.97
- 7) 同上 p.103
- 8) 西川隆『くすりの社会誌 人物と時事で読む33話』薬事日報社 2010年2月 p.145

Ⅳ. 薬学教育の改革

- 1) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科：人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p.194
- 2) 根本曾代子『日本の薬学：東京大学薬学部前史』南山堂 1981年7月 p.284-286
- 3) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 部局史二』東京大学出版会 1987年3月 p.1117
- 4) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科：人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p.196-197
- 5) 同上 p.198-199

Ⅴ. 日本薬剤師協会の設立と「医薬分業法」の制定

- 1) 西川隆「戦後昭和の歴代日本薬剤師会長の事績に関する一考察—業権確立を求め、いかに考えいかに歩んだか」『薬史学雑誌』43(2) 2008年12月 p.151

- 2) 根本曾代子『慶松勝左衛門傳』廣川書店 1974年7月 p.234-235, 262
- 3) 指田豊「薬事行政を主導した生薬学者・刈米達夫」『薬学史事典』薬事日報社 2016年3月 p.324-326
- 4) 西川隆『「くすり」から見た日本一昭和20年代の原風景と今』薬事日報社 2004年1月 p.401-402
- 5) 同上 p.394
- 6) 二至村菁『日本人の生命を守った男 : GHQ サムス准将の闘い』講談社 2002年3月 p.245
- 7) 同上 p.252-257
- 8) 西川隆『「くすり」から見た日本一昭和20年代の原風景と今』薬事日報社 2004年1月 p.410
- 9) 同上 p.412, 417
- 10) 刈米達夫、根本曾代子編『刈米達夫先生回想録』廣川書店 1982年8月 p.132
- 11) 西川隆『「くすり」から見た日本一昭和20年代の原風景と今』薬事日報社 2004年1月 p.418-425
- 12) 同上 p.429-430

VI. 薬学科の発展

- 1) 末廣雅也「生物系薬学の確立に尽くした伊藤四十二」『薬学史事典』薬事日報社 2016年3月 p.333-334
- 2) 辰野高司編『対談でつづる昭和の薬学の歩み』東京理科大学薬学部同窓有志会 1994年1月 p.18
- 3) 相見則郎「菌類成分の化学から生薬学・天然物化学研究を展開した柴田承二」『薬学史事典』薬事日報社 2016年3月 p.348-350
- 4) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科 : 人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p.140-141
- 5) 岡本敏彦編『落合英二先生回想録』落合英二先生顕彰会 1992年4月 p.80-81
- 6) 西川隆『「くすり」から見た日本一昭和20年代の原風景と今』薬事日報社 2004年1月 p.303-305
- 7) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科 : 人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p.132-133
- 8) 同上 p.182-184
- 9) 同上 p.115-118
- 10) 末廣雅也「薬学の振興と薬剤師の職能発揮に尽くした高木敬次郎」『薬学史事典』薬事日報社 2016年3月 p.351-352

VII. 戦後の二代目教授

- 1) 菅澤重彦「慶松勝左衛門先生」『化学』18(7) 1963年7月 p.627
- 2) 根本曾代子『慶松勝左衛門傳』廣川書店 1974年7月 p.262
- 3) 日本薬剤師会『創立百年記念日本薬剤師会史』1994年3月 p.165
- 4) 根本曾代子『慶松勝左衛門傳』廣川書店 1974年7月 p.272
- 5) 日本薬剤師会『創立百年記念日本薬剤師会史』1994年3月 p.172
- 6) 近藤平三郎；根本曾代子編『藤園回想』廣川書店 1964年2月 p.275
- 7) 同上 p.276-277
- 8) 岡本敏彦編『落合英二先生回想録』落合英二先生顕彰会 1992年4月 p.102-103
- 9) 根本曾代子『朝比奈泰彦傳』廣川書店 1966年1月 p.305-311
- 10) 同上 p.38-39
- 11) 西川隆「日本薬史学会誕生の時代背景－創立70周年「過去は未来への序章」を貫く」『薬事日報』2024年1月1日 p.12
- 12) 根本曾代子『朝比奈泰彦傳』廣川書店 1966年1月 p.370
- 13) 末廣雅也・西川隆「わが国薬学に薬理学・生化学分野を導入した緒方章」『薬学史事典』薬事日報社 2016年3月 p.322-323

VIII. 東京大学薬学部創立

- 1) 伊沢凡人編著『薬学の創成者たち：自伝対談』出版科学総合研究所 1977年12月 p.223
- 2) 柴田承二「東大薬学部創設50周年に際して」『東京大学薬学部創立50周年記念誌』東京大学薬学部 2008年4月 p.10
- 3) 蝦名賢造『石館守三伝：勇ましい高尚なる生涯』新評論 1997年3月 p.110-111
- 4) 大澤利昭「東大薬学部50年によせて」『東京大学薬学部創立50周年記念誌』東京大学薬学部 2008年4月 p.23
- 5) 蝦名賢造『石館守三伝：勇ましい高尚なる生涯』新評論 1997年3月 p.109-111
- 6) 同上 p.111

IX. 三代目教授の事績

- 1) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科：人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p.141
- 2) 同上 p.134
- 3) 一丁田健一「スポーツマンの菅澤先生」『菅澤重彦先生生誕七十五年記念論文集』菅澤重彦先生生誕七十五年記念会 1972年4月 p.388
- 4) 西川隆『くすりの社会誌 人物と時事で読む33話』薬事日報社 2010年2月 p.190-192

- 5) 岡本敏彦編『落合英二先生回想録』落合英二先生顕彰会 1992年4月 p.306
- 6) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科：人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 p. 186-188
- 7) 蝦名賢造『石館守三伝：勇ましい高尚なる生涯』新評論 1997年3月 p.230-231
- 8) 石館守三『はまなすのこみち：私の歩んだ道』廣川節男 1988年5月 p.59
- 9) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科：人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p. 155-157
- 10) 松尾恒雄「師を憶い任を思う」『薬学図書館』21(2) 1976年9月 p.95
- 11) 鶴藤丞「伊藤先生を偲ぶ」『ファルマシア』12(9) 1976年9月 p.713
- 12) 馬場重徳「伊藤四十二先生回顧」『薬学図書館』21(2) 1976年9月 p.91
- 13) 川瀬清「日本薬史学会50年の歩み」『日本薬史学会五十年史』日本薬史学会 2004年9月 p.27-29
- 14) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科：人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p.119
- 15) 相見則郎「菌類成分の化学から生薬学・天然物化学研究を展開した柴田承二」『薬学史事典』薬事日報社 2016年3月 p.348-351
- 16) 奥山徹「柴田承二先生との思いを語る」『薬史学雑誌』52(2) 2017年12月 p.112
- 17) 西川隆『東京帝国大学医学部薬学科：人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』薬事日報社 2020年3月 p.158-159
- 18) 松木則夫「偉大な先駆者の死を悼む」『ファルマシア』54(6) 2018年6月 p.591

<人物編>

菅澤重彦

菅澤重彦は明治 31 (1898) 年 4 月 2 日、大阪の眼科医に家に生まれた。第三高等学校を経て、大正 11 (1922) 年 3 月、東京帝国大学医学部薬学科を卒業し、大学院で慶松勝左衛門教授の指導を受けた。

大正 12 (1923) 年 12 月、薬品製造学教室の助手となり、グルタミン酸、オルニチン、リジンなどアミノ酸類の新合成法を開発した。昭和 4 (1929) 年 2 月、イギリスに留学し、ロンドン大学、マンチェスター大学でロバート・ロビンソン教授に師事し、有機合成化学を学んだ。昭和 7 (1932) 年 3 月帰国し、助教授に就任し、昭和 12 (1937) 年 4 月、慶松勝左衛門教授の後任として薬品製造学講座の教授に昇任した。菅沢はロビンソン教授に学んだ植物塩基の含窒素異項環状化合物の合成を研究の主力とし、インドール系化合物、キノリン研究に成果を上げた。昭和 18 (1943) 年 5 月、「ジベンツォヒノリン並びにジベンツォヒノリチン誘導体の合成研究」で帝国学士院賞を受賞した。

昭和 21 (1946) 年、ストレプトマイシンに続く結核治療薬としてパラアミノサリチル酸 (PAS) がスウェーデンの生化学者 J・レーマン教授に発見されたが、昭和 23 (1948) 年 8 月、菅澤の指導により田辺製薬東京研究所が試供品作成に着手した。

昭和 27 (1952) 年 2 月、結核の特効薬としてイソニコチン酸ヒドラジド (INH) がアメリカで紹介されると日本での発売について問い合わせが厚生省に殺到した。この注目の物質 (INH) を菅澤が所有していたため、騒ぎはエスカレートした。当時、菅澤は医薬品原料の製造法の改良について研究を行っていたが、菅澤が指導していた東京薬科大学の亀谷哲治助教授と飯田英夫助手の研究室で既に合成に成功していた。

菅澤は「この物質が結核新薬であるとは、全く偶然のことだ」と述べたが、大学には INH を求める手紙が連日寄せられたという。それだけに「今度の結果から日本の科学研究のやり方が医薬品を発見するには、全く不都合なことが伺える」という菅澤の反省は医学・薬学界に大きな反響を与えた。

しかし、菅澤の合成法により田辺製薬東京研究所を始めとする製薬各社は試供薬 INH の製造に取り組み、INH 発見の報から半年後の昭和 27 (1952) 年 7 月に厚生省は薬事審議会の答申を得て、製薬会社に製造販売を許可し、結核の死亡率は大幅に減少した。

菅澤は昭和 24 (1949) 年 4 月、日本薬学会会頭に選任され、有機化学を駆使して医薬品の合成研究に数々の業績を残し、昭和 34 (1959) 年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は田辺製薬の顧問に就任し、同社の有機化学研究所で若い研究者の製薬指導に当たり、平成 3 (1991) 年 3 月 3 日、93 歳で逝去した。

長身瘦躯の菅澤は英国紳士でいつも端正な姿勢で簡明直截、立板に水のような淀みない講義で学生を魅了した。酒を嗜まず、大の甘党でゴルフを愛好し、明朗闊達な人柄で多くの門下生に慕われた。晩年、ゴルフを止め、内外の化学の新着雑誌に親しく目を通す姿は責任を重んじる明治人の風格があった。

落合英二

落合英二は明治 31 (1898) 年 6 月 26 日、埼玉県浦和の教育家落合初太郎の三男として生まれた。幼少時は虚弱であったが、植物採集に熱中して健康になった。第二高等学校を経て東京帝国大学医学部薬学科に入学し、長井長義教授の独創の実験指導に感銘を受けた。大正 11 (1922) 年 5 月、薬化学教室の副手となり、近藤平三郎教授の指導を受け、大正 15 (1926) 年 5 月助手、昭和 5 (1930) 年 3 月助教授に昇任した。

昭和 5 (1930) 年 7 月、ドイツ留学を命じられ、フライブルク大学のスタウディンガー教授に高分子化学、ボン大学のファイファー教授に有機金属錯体、オーストリアのグラーツ大学のプレーグル教授に有機微量分析を学んだ。昭和 7 (1932) 年 9 月帰国し、昭和 12 (1937) 年 12 月、近藤平三郎教授の後任として薬化学講座の教授に昇任した。

落合はアルカロイド構造研究の基本骨格である含窒素芳香族複素環状の研究に取り組み、有機電子論を駆使して独自の研究分野を展開した。昭和 19 (1944) 年 5 月、「芳香族複素環塩素に関する研究」で帝国学士院賞を受賞した。

昭和 31 (1956) 4 月、日本薬学会会頭に選任され、昭和 34 (1959) 年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は近藤平三郎が理事長を務める乙卯研究所所長に就任し、『長井長義傳』の編纂委員長を委嘱された。昭和 35 (1960) 年 2 月、日本薬学会創立 80 周年記念事業をして金尾清造著、長井長義傳編纂委員会及び長井長義先生顕彰会編纂によって『長井長義』が刊行された。

昭和 38 (1963) 年 1 月 8 日、薬学者として初めて講書始で「アルカロイドについて」を昭和天皇にご進講した。アルカロイドは近藤平三郎の畢生の研究テーマであり、落合は近藤を学問のみならず人生の師として深く敬愛し、師弟の清廉な情誼は終生変わらなかった。

それから 10 ヶ月後の 11 月 17 日、近藤は愛弟子の大成を見届けるかのように 85 歳で逝去し、乙卯研究所と日本薬学会の合同葬儀が厳粛に執り行われた。落合は葬儀委員長として近藤の偉功を偲び、乙卯研究所理事長を継承した。

昭和 44 (1966) 年 4 月、文化勲章を受章した。薬学分野では朝比奈泰彦、近藤平三郎に続く 3 人目の受賞であった。昭和 47 (1972) 年 2 月竣工した日本薬学会長井記念館の建設委員長として多大な尽力を果たし、館内入口正面の銘板に「長井記念館由来之記－落合英二文、金尾清造書」として銘文を謹記した。しかし、この時には持病の輪胆管閉塞症が再発しており、昭和 49 (1974) 年 11 月 4 日、76 歳で逝去した。

厳格な研究態度と実験第一主義を貫いた落合とその協力者による研究は論文 526 報と著書 8 編に達し、日本の薬化学を世界的水準に引き上げ、多くの優れた研究者を育成した。直截で野人的な人柄は学生を魅了し、門下生の岩井一成（三共株式会社取締役製品計画部長）は落合のことを「人間として温かく清潔な生きざまを貫かれ、われわれの師表でした」と回顧している。

石館守三

石館守三は明治 34 (1901) 年 1 月 24 日、青森市の薬種商の三男に生まれた。青森中学校在学中、家業の手伝いで東北保養園 (国立ハンセン病療養所) に行き、悲惨な患者の症状に強い衝撃を受けた。当時は治療薬として大風子油しかなく、ハンセン病の治療薬研究のために薬学を志した。旧制第二高等学校を経て、大正 11 (1922) 年 4 月、東京帝国大学医学部薬学科に入学し、本郷西片町の同志会に入寮した。同志会はキリスト教主義の学生寮で明治 35 (1902) 年、阪井徳太郎が創設した。石館は同志会の学生生活の中に「人生の方向と、私のその後の生き方を決定した要因があった」と後年回顧している。同志会で上級生の小西芳之助と出会い、小石川白山教会の宣教師ミス・ローラ・モークのバイブルクラスに出席し、大手町の内村鑑三の聖書研究会の講話に導かれ、2 年の時にキリスト教の洗礼を受けた。

3 年の時に生薬学教室に入り、朝比奈泰彦教授に師事した。朝比奈教授の「被造物の一つ、植物標本の一握りさえ与えられるなら、一生を譬え牢獄に呻吟しようとも、あえて後悔しない」という自然科学者の心境に接して心を揺さぶられ、卒業後は生薬学教室の副手を経て、昭和 9 (1934) 年 5 月に助手となった。

その間、朝比奈教授の指示で医学部薬理学教室の田村憲造教授に協力し、樟脳の生化学研究を行い、樟脳の強心・中枢興奮作用を発言する本態を突き止め、ピタカンファーを創製し、昭和 7 (1932) 年、武田薬品から強心剤として発売された。昭和 11 (1936) 3 月ドイツに留学し、ハイデルベルク大学のクーン教授の下でアミノ酸、ベタイン系化合物の合成など有機化学を学び、さらにオーストリアのグラーツ大学のプレーグル教授に有機微量分析法、ウィーン大学のファイグル教授に発色反応、チェコのプラーク大学のハイロウスキー教授にポーラログラフ法を学び、昭和 13 (1938) 年 7 月帰国した。

昭和 14 (1939) 年 4 月、臓器薬品化学講座の高木誠司助教授が京都帝国大学医学部薬学科薬品分析化学講座教授に就任したため、その後任として助教授に就任し、昭和 17 (1942) 年 1 月、新設の薬品分析化学講座の教授に昇任した。昭和 18 (1943) 年 5 月、田村憲造・石館守三・木原玉汝「樟脳の強心作用の本態に関する研究」で帝国学士院賞を受賞した。

太平洋戦争下、石館はサルファ剤の結核への応用に携わっていたが、昭和 18 (1943) 年頃、米国の研究でサルファ剤のプロミンが「らい菌」に効くという情報を入手した。青森中学校在学中にハンセン病患者を救う決意を抱いた石館は教室員にプロミンの合成を指示し、終戦直後の昭和 21 (1946) 4 月、「石館プロミン」の合成に成功した。

「石館プロミン」のサンプルは石館自身が国立療養所多磨全生園に持ち込み、臨床試験を依頼した。当初は希望者がいなかったが、やがて中国の戦地から帰国した重症の結節らいの湊一義という青年がプロミンの投与を希望した。1 日おきに約 60 日間の静脈注射をしたところ、失明寸前の視力がかなり回復し、顔面の結節も消失した。

プロミンの効果は入院患者の間で評判になり、早く作ってほしいという依頼が殺到したため、昭和 23 (1948) 年に厚生省の認可を受け、吉富製薬がプロミンを製造し、厚生省が一括して買い上げ、入院患者に限り適用することになった。

石館は新しい抗がん剤の開発にも貢献した。東北大学医学部病理学教室の吉田富蔵教授はネズミに肝臓がんを発生させ、腹水がんを発見し、「吉田肉腫」と命名した。吉田教授の知見に接し、石館は共同研究を申し入れたが、当時がんの化学療法剤に手を出すことは一種の野心家としか考えない風潮があり、吉田教授は容易に同意しなかった。

しかし、がん研究の究極の目的は不幸な難病の克服であることに意気投合し、共同研究が開始された。そして、「ナイトロミン」を開発し、昭和 27 (1952) 年に吉富製薬から抗がん化学療法剤として発売された。

昭和 33 (1958) 年 4 月、東京大学医学部薬学科から独立し、薬学部薬学科が創立された。石館は主任教授として東京大学総長矢内原忠雄の協賛を求め、文部省大学課長の大学から申請があれば承認するという言質を得た。医学部長小林芳人の了解のもとに医学部教授会が開かれ、多数決で薬学科分離の同意を得た。石館は初代薬学部長に就任した。

昭和 36 (1961) 年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後も日本キリスト教海外医療協力会長、共立薬科大学理事長、国立衛生試験所所長、薬事審議会会長、笹川記念保健協力財団理事長などの要職を歴任した。その間、スモン病の原因と考えられていた整腸薬キノホルムの販売使用禁止、水銀を含む医薬品、化粧品の製造禁止を答申し、薬害の防止に多大な尽力を果たした。

昭和 45 (1970) 年 12 月、石館は日本薬剤師会会長に就任した。薬種商の後継を期待していた父への恩返しと日本の薬剤師のおかれている現状に思いを致し、周囲の反対を押し切って就任した。恩師朝比奈泰彦は「心残りは薬剤師会の手伝いができなかったことだ。何か手伝うことがあるなら、何でもしてやる」と温かく激励した。

昭和 57 (1982) 3 月に退任するまで 11 年 4 ヶ月間会長を務めたが、最大の功績は薬剤師の宿願であった医薬分業を軌道に乗せたことである。歴代の厚生大臣と個別の会談を重ね、分業推進を要望し、日本医師会会長武見太郎と信頼関係を構築した。その結果、昭和 49 (1974) 年 10 月から診療報酬改定され、処方箋料が大幅に引き上げられ、「医薬分業元年」を迎えることになった。

平成 5 (1993) 年 11 月、石館は久しぶりに全生園を訪れ、コスモスの咲く庭で最初にプロミンを使用した湊一義と再会を果たした。あの日から 50 年の歳月が流れ、石館は 92 歳、湊は 80 歳になっていた。平成 8 (1996) 年 7 月 18 日、高円寺の自宅で 95 歳の天寿を全うした。石館は回想録『はまなすのこみち』で「人は目に見えない大きな摂理に行き、生かされていると思わざるを得ない」と述べている。若き日に同志会で学んだ「神と人とに仕える」が石館の人生の指針であり、数多の人々がその温かい光によって救われた。日本薬学界の気高き名峰として不朽の足跡を残した生涯であった。

秋谷七郎

秋谷七郎は明治 29 (1896) 年 11 月 7 日、千葉県我孫子市に生まれた。旧制第二高等学校を経て、大正 12 (1923) 年 3 月、東京帝国大学医学部薬学科を卒業した。衛生裁判化学教室の副手を経て、大正 14 (1925) 年に助手となった。

昭和 7 (1932) 年、東京薬学専門学校女子部教授になり、昭和 10 (1935) 年に校長の杉井善雄が北海道帝国大学附属病院薬局長に転任したので、校長に就任した。昭和 17 (1942) 年 3 月 25 日、恩師服部健三教授が 57 歳で逝去したことに伴い、同年 5 月衛生裁判化学講座の教授に就任した。

昭和 16 (1941) 年 12 月 8 日、太平洋戦争が始まり、昭和 17 (1942) 年 1 月、科学技術行政機関として技術院が設置された。昭和 18 (1943 年) 10 月、技術院の主導により臨時戦時研究員設置制が公布され、科学者も軍事協力を余儀なくされた。

昭和 18 (1943) 年、ドイツ駐在陸軍武官から米国が DDT (殺虫剤) をアフリカ戦線の将兵に与えて防疫に成功した情報が入ったので、陸軍省は陸軍軍医学校にその調査研究を命じた。当時、陸軍省囑託であった秋谷を中心に研究に当たり、DDT (殺虫剤) の合成に成功した。

また、潜水艦で使用する味噌のカビを防止するためにクエン酸の添加を試みたところ、カビ防止の効果以外に乗組員の疲労度が目立って低くなり、健康状態が著しく向上し、尿中の乳酸量が減少する事実を突き止めた。その他、マラリアの治療薬であるキニーネの代用薬、軍服のカーキ色の低温染色法に研究に力を注いだ。

戦後は糖質化学を中心とする生化学的研究に重点を移し、最新の精密分析機器の紫外・可視・赤外分光スペクトル、濾紙・カラム・薄層クロマトグラフィーなどを活用して国民生活に直結するメチルアルコール含有の不良酒、贗サッカリンなどの不良甘味料、有毒色素を使用した不良着色飲料水の追放に役立たせた。

秋谷の名前を一躍有名にしたのは「下山事件」の鑑定である。昭和 24 (1949) 年 7 月 5 日、国鉄総裁下山定則が出勤途中に失踪し、翌 7 月 6 日未明に常磐線北千住駅・綾瀬駅間、東武伊勢崎線との立体交差部ガード下付近で下山の轢死体が発見された。

遺体の司法解剖の指揮を執った東京大学法医学教室の古畑種基教授の依頼で衛生裁判化学教室の総力を挙げて協力し、下山の上着などに付着した油脂を解明し、pH 曲線による死後経過時間の測定などから古畑と共に死後轢断説を主張し、他殺説の有力な根拠となった。

昭和 32 (1957) 年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は東京医科歯科大学医学部附属総合法医学研究施設長、昭和大学薬学部教授、中央薬事審議会委員長など要職を歴任し、昭和 53 (1978) 年 8 月 11 日、82 歳で逝去した。

科学捜査研究所顧問として幾多の刑事事件の鑑定を手がけ、鑑定技術の体系的基礎を確立し、鑑識方面で活躍する数多くの優れた人材を育成した功績は大きい。

浅野三千三

浅野三千三は明治 27 (1894) 年 9 月 18 日、千葉県に生まれた。旧制第一高等学校を経て、大正 8 (1919) 年 7 月、東京帝国大学医学部薬学科を卒業し、朝比奈泰彦教授に師事した。大正 14 (1915) 年、金沢医科大学附属薬学専門部教授となった。

昭和 2 (1927) 年から 3 年間、ドイツのフライブルク大学に留学し、ウィーランド教授に化学と生化学の結合に関する新分野の研究を学んだ。帰国後は金沢医科大学附属薬学専門部を統括する主事となり、恩師朝比奈教授の地衣成分の研究を発展させ、昭和 11 (1936) 年 5 月、「地衣脂肪酸並にプルヴィン酸系色素に関する研究」で帝国学士院賞を受賞した。

昭和 13 (1938) 年 4 月、東京帝国大学伝染病研究所教授 (化学部長) に就任した。伝染病研究所の長谷川秀治教授が朝比奈教授に有機化学の適任者を依頼し、朝比奈教授が浅野を適任者と考え、金沢から呼び戻したのである。昭和 16 (1941) 年 3 月、生薬学講座の朝比奈教授の退官に伴い、東京帝国大学医学部教授を兼任し、植物化学の講義と実習を担当した。

浅野の研究テーマは抗マラリア剤の開発に始まり、結核に対する化学療法剤の研究、結核菌脂肪酸とキノール脂肪酸の合成研究、薬物代謝による脳内アミノール酸の変化、緑濃菌代謝産物の研究、ベンゾキノリン系植物色素の研究へと拡大した。医学・薬学領域の広範囲に亘り、新しい薬学を拓く先駆的研究となった。

太平洋戦争末期の昭和 19 (1944) 2 月、浅野は陸軍軍医学校の稲垣克彦少佐と東京帝国大学伝染病研究所の梅澤濱夫助教授の主導で日本独自のペニシリンの研究開発を目的として設置されたペニシリン委員会にも参画した。

ペニシリン委員会は医学・薬学・理学・農学の著名な研究者で構成され、薬学からは浅野と石館守三教授が参画した。浅野は伝染病研究所の梅澤助教授とは昵懇の間柄で長年、細菌、カビ、地衣成分の代謝産物を研究し、天然物有機化学と生物化学に造詣が深かった。

浅野は地衣成分から抽出した 37 種の構造既知物質を始め、下等植物や微生物からの生産物、それらの関連物質を数多く合成し、積極的にその抗菌作用研究に取り組んだが、ペニシリンその他の抗菌物質の発見には至らなかった。

昭和 19 (1944) 年 12 月 27 日、朝比奈教授の後任の藤田直市教授が在任 3 年 9 ヶ月で急逝したことに伴い、昭和 20 (1945) 年 1 月、生薬学講座の教授に就任した。しかし、戦中から戦後にかけて蓄積した過労により、昭和 23 (1948) 年 4 月 17 日、54 歳で急逝した。

浅野をよく知る後輩の菅澤重彦は「僕は実験の手ほどきを浅野先生にさせていただいたのです。勉強家でもあり温厚な紳士でもあられた浅野先生がもしもう少しご長命であつたら、日本の薬学の歴史は変わっていたかもしれない」とその急逝を惜しんだ。

伊藤四十二

伊藤四十二は明治 42（1909）年 1 月 9 日、兵庫県に生まれた。旧制東京高等学校を経て、昭和 3 年（1928）4 月、東京帝国大学医学部薬学科に入学し、臓器薬品化学教室で緒方章教授の指導を受けた。卒業後は副手を経て、昭和 11（1936）年岐阜薬学専門学校教授に就任し、昭和 17（1942）年 4 月、臓器薬品化学講座の助教授として緒方教授の下に復帰した。

緒方は医学部病理学教室と提携して唾液腺ホルモンの研究に着手していたが、伊藤もこれに協力し、唾液腺ホルモンの効力検査法を独自の見解で展開し、病理学教室の試験成績と一致する新知見を得た。昭和 23（1948）年 3 月、緒方が停年により退官し、後任として臓器薬品化学講座の担当教授に昇任した。伊藤は名誉教授の緒方と共に唾液腺ホルモン研究をさらに発展させ、世界的業績を残した。

昭和 29（1954）年 9 月、臓器薬品化学講座から薬理学を分離し、薬学科 8 番目の講座として薬品作用学講座が開設され、臓器薬品化学講座は生理化学講座と改称され、伊藤と助手 1 名の不完全講座が続いたが、昭和 33（1958）年 1 月鶴藤丞助教授と助手 3 名が任命され、完全講座となった。

昭和 35（1960）年 4 月、石館守三に続き、伊藤は第二代薬学部長に就任し、薬学教育協議会会長として文部省の「薬科大学設置基準」作成の主役を務め、設置基準の講座数の増加と分科制の導入を実現した。

昭和 44（1969）年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は静岡薬科大学学長に就任し、教育方針として教養・専門の両課程を教育の両輪とし、専門課程では「薬品化学分野」「生物薬学分野」「医療薬学分野」「薬品工学」の 4 コース制を実現した。また、日本薬学会会頭、文部省大学設置審議会会長の要職を歴任した。特筆すべきは研究・教育における図書館の果たすべき役割を重視したことである。薬学の将来のためには図書館の充実整備が最も重要であると考え、伊藤の呼びかけで昭和 30（1955）年 4 月、日本薬学図書館協議会が設立され、初代理事長に就任した。昭和 39（1964）年 1 月、東京大学附属図書館の改革に渾身の力を傾注した岸本英夫館長が急逝した。伊藤は後任の附属図書館長として「岸本改革」で知られる岸本の遺志を継ぎ、総合図書館と部局図書館との連携・協力、指定書制度を充実させた。

「研究の裏方を務めている図書館員の類いまれな理解者」である伊藤は館員の研究・研修に対する周囲の理解を増すことに尽力し、機会ある度に館員の資質向上を説いた。静岡薬科大学学長在任中の昭和 51（1976）年 6 月 9 日、67 歳で急逝し、多方面に強い衝撃を与えた。馬場重徳（図書館短期大学教授）は伊藤への満腔の謝意と哀惜の念を込めて「先生は心から実行の方であった。理想を秘め、同じ心に燃える人に活動の場を備え供し、あるいは不案内な心に火を自燃させ、一つの火勢に整合させて行くような心の暖かい配慮深い賢明な折目正しい方であった」とその逝去を悼んだ。

柴田承二

柴田承二は大正4（1915）年10月23日、東京に生まれた。祖父は近代日本薬学の創始者の柴田承桂、父は植物学者で東京帝国大学理学部教授の柴田桂太、叔父は化学者で東京帝国大学理学部教授の柴田雄次という学者一家であった。

このような家庭環境で育った柴田は旧制成蹊高等学校を経て、昭和10（1935）年4月、東京帝国大学医学部薬学科に入学した。柴田の研究人生は卒業実習のために昭和12（1937）年朝比奈泰彦の生薬学教室に入った時に始まる。与えられたテーマは地衣バンダイキノリの成分プソロム酸の構造確認で研究を進める中で先人の構造式に誤りがあることに気づき、原料抽出からやり直して、正しい構造式を朝比奈教授に提出した。その結果は朝比奈教授と連名でドイツ化学会誌に掲載された。

昭和17（1942）年、生薬学教室の助手となり、昭和19（1944）年、東京大学南方自然科学研究所助教授に昇任した。昭和23（1948）年4月、生薬学講座の浅野三千三教授が54歳で急逝したため、東京大学立地自然科学研究所助教授の柴田が講座担任になり、昭和25（1950）年2月、教授に昇任した。

昭和28（1953）年10月、ロンドン大学衛生熱帯医学研究所のハロルド・レイストリック教授の下でペニシリウム・イストラジクムの色素を研究し、帰国後は社会問題化していたイスランディア黄変米事件の原因菌となった毒成分の構造を解明した。

また、恩師朝比奈教授の地衣成分の研究を発展させ、地衣成分のテレフォル酸とジジム酸の構造を明らかにし、植物二次代謝産物の生合成研究でエフェドリン、マトリンなどアルカロイド類、菌類代謝産物について数々の発見をし、昭和48（1973）年5月、「或種の菌類及び地衣類代謝生産物の研究」で日本学士院賞を受賞した。

昭和23（1948）年9月、宮内府図書頭から正倉院御物中の薬物調査の依頼があり、朝比奈泰彦を代表とする正倉院薬物調査団が組織され、柴田も班員として参加した。さらに平成6（1994）年、宮内庁の委嘱で第二次調査団が組織され、柴田は団長として正倉院宝庫の中で生薬の鑑定・同定を行い、その調査結果は平成12（2000）年12月、『図説正倉院薬物』（柴田承二監修）として刊行された。

昭和48年（1973）年4月、日本薬学会会頭に選任され、昭和51（1976）年3月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は明治薬科大学で10年間、若い研究者を育成した。昭和61（1986）年10月から20年間『植物研究雑誌』の編集長、平成3（1991）年から14年間日本薬史学会会長を務め、平成9（1997）年、文化功労者に顕彰された。平成28（2016）年7月12日、101歳の天寿を全うした。

自伝『薬学研究余録』は昭和・平成期の日本薬学史の貴重な資料である。柴田は絵画、音楽に造詣が深く、明治薬科大学では昼休みにテニスを楽しみ、研究室の旅行先はテニスコートがある場所を選び、夜は学生と酒を飲みながら談笑した。研究指導は厳格であったが、研究を離れるともの静かでいつも微笑んでいたという。

野上寿

野上寿は明治 43 (1910) 年 7 月 28 日、岡山県に生まれた。旧制福岡高等学校を経て、昭和 9 (1923) 年 3 月、東京帝国大学医学部薬学科を卒業し、生薬学教室の助手となった。昭和 17 (1942) 年、大阪帝国大学医学部附属病院薬局長に就任した。

昭和 23 (1948) 年 3 月、畑忠三の停年に伴い、東京大学医学部助教授兼附属病院薬局長に転じた。昭和 24 (1949) 年 7 月、米国薬剤師協会使節団が来日し、薬学教育を薬剤師の業務に適するよう勧告し、調剤学の重要性が指摘された。さらに、戦後は欧米から画期的な新薬が次々に紹介され、製剤学の研究が急務になっていた。

こうした状況を背景に昭和 26 (1951) 年 7 月、薬学科で 7 番目の講座として製剤学講座が開設され、野上が附属病院薬局長兼任で初代教授に就任した。しかし、当初は教授一人で人員、研究室もなく、附属病院薬局研究室を併用し、薬局助手の協力を仰ぐ状態であった。昭和 27 (1952) 年 11 月、附属病院薬局助手の長谷川淳が助教授に昇任したが、助手は附属病院薬局助手が代行する不完全講座であった。

昭和 31 (1956) 年 9 月、野上の英断により東京大学医学部附属病院は 1 回 7 日以上の調剤を行う場合に希望者に院外処方箋を発行する措置を取った。同年 4 月 1 日から「医薬分業法」が施行されたが、医師の調剤権が認められていたので、この措置は開局薬剤師にとって一筋の希望となった。

昭和 39 (1964) 年 4 月、石館守三、伊藤四十二に続き、野上は第三代薬学部長に就任し、薬学系研究科・薬学部の組織を拡充した。昭和 40 (1965) 年 4 月、大学院化学系研究科を改組し、大学院薬学系研究科として独立させ、大学院薬学系研究科製薬化学専門課程に博士課程を設置した。また、高度経済成長期に頻発した薬害に対応するために、昭和 41 (1966) 年 4 月、附属薬害研究施設を新設して衆目を集めた。野上は施設長を併任し、薬害作用部門担当として粕谷豊助教授が教授に昇任した。

昭和 46 (1971) 年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は日本薬剤師会副会長、日本薬学会会頭を務めた。昭和 61 (1986) 年から日本薬史学会会長に就任し、様々な発展策を打ち出した。会員の学位取得を支援し、会員増強のために評議員会を新設し、財政基盤を強化するために賛助会員の増加を積極的に遂行した。日本薬学会年会から薬史学部会を独立させ、昭和 62 (1987) 年 10 月、明治薬科大学（世田谷校）に「薬史学文庫」を開設した。しかし、会長在任中の平成 2 (1990) 年 10 月 10 日、80 歳で急逝した。

その研究分野は錠剤、粉末剤の特性及び薬物の物理化学的性質と薬理効果の研究、薬剤の皮膚、粘膜、消化管よりの吸収機構の研究、薬剤の分解とその安定化の化学反応速度論的研究など広範囲に及んだ。研究論文数は 100 余編に達し、日本の製剤学、薬剤学を発芽、発展させ、薬剤学の体系化を構築した。「無」の状態から日本の薬剤学を創始したその生涯は不朽の足跡であった。

高木敬次郎

高木敬次郎は大正4（1915）年11月28日、神奈川県横浜市で代々薬局を営む名家に生まれた。旧制東京高等学校を経て、昭和11年（1936）4月、東京帝国大学医学部薬学科に入学し、臓器薬品化学教室で緒方章教授の指導を受け、卒業後は副手を経て昭和15（1940）年2月、臓器薬品化学教室の助手になった。

高木は有効成分不明な動物成分（解熱剤の地龍、鎮痛剤の赤とんぼなど）の成分研究を行い、赤とんぼの黒焼きに鎮痙作用が認められるという新知見を得た。イナゴでも同様の結果であった。

昭和23（1948）年3月、緒方が停年により退官し、伊藤四十二助教授が後任教授に昇任し、高木も助教授に昇任した。昭和29（1954）年9月、薬学科8番目の講座として薬品作用学講座が開設され、熊谷洋教授（医学部薬理学講座）の併任で発足した。昭和29（1954）年1月、結核による療養生活を余儀なくされたが、健康を取り戻し、昭和30（1955）年9月に復帰し、昭和32（1957）年11月、薬品作用学講座の教授に昇任した。

昭和33（1958）年4月、医学部から薬学科は分離し、東京大学薬学部が創設され、薬品作用学講座助教授に粕谷豊、助手に福田英臣が任命され、完全講座となった。高木はジフェニールブタノールアミン系化合物のアセチルコリン作用に着目し、その構造活性相関をテーマにし、後に興和から鎮痙剤アスパミノールとして発売された。

その後、東京大学医学部附属病院薬剤部長を兼任し、全国国立大学病院薬剤部長会議代表を引き受け、薬剤部長の技官職から教授職への振替、DI（ドラッグインフォメーション）業務の充実に取り組んだ。昭和49（1974）年5月、薬学部長に就任し、昭和51（1976）年3月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は東京理科大学薬学部教授、同薬学部長を務めた。その間、薬学界の指導者として日本薬学会会頭、日本病院薬剤師会会長、厚生省中央薬事審議会委員などを歴任した。

昭和59（1984）年4月、高木は日本薬剤師会会長石館守三の強い懇請を受け、後任の会長に就任した。高木は医薬分業の質を高めることが不可欠であると判断し、処方箋の監査から薬剤の交付、服薬指導、薬歴の作成・活用までの一貫する流れの中で患者が医薬分業のメリットを実感できるかがポイントであると薬剤師に訴え続けた。

また、医療機関を限定せずに広く処方箋を受け付ける面分業（かかりつけ薬局）の実現に取り組んだ。柴田承二の門下生で参議院議員の石井道子が政治生命を賭けてめざした「薬剤師を医療の担い手」を医療法第一条に記載させることにも全面的に協力し、平成4（1992）年6月の医療法改正で実現した。

「若い頃から“好々爺”の風貌で、現状の不満を述べられることはあまりなく、常にポジティブで前向の発想であった」と評された高木は亡くなる前日も普段どおりに食事をし、平成30（2018）年1月29日、102歳の天寿を全うした。

東京大学医学部薬学科 年表		
昭和 16 (1941) 年	12 月	薬品分析化学講座増設
昭和 17 (1942) 年	1 月	石館守三助教授が薬品分析化学講座担任教授に昇任
	3 月	第一講座（衛生裁判化学）の服部健三教授逝去 57 歳
	5 月	東京薬学専門学校女子部校長秋谷七郎が第一講座（衛生裁判化学）教授に就任
昭和 18 (1943) 年	4 月	朝比奈泰彦名誉教授、文化勲章受章
	5 月	菅沢重彦教授「ジベンツォヒノリン並びにジベンツォヒノリチン誘導体の合成研究」で帝国学士院賞受賞
	5 月	田村憲造・石館守三・木原玉汝「樟脳の強心作用の本態に関する研究」で帝国学士院賞受賞
昭和 19 (1944) 年	5 月	落合英二教授「芳香族複素環塩素に関する研究」で帝国学士院賞受賞
	12 月	第三講座（生薬学）の藤田直市教授逝去 59 歳
昭和 20 (1945) 年	1 月	東京帝国大学伝染病研究所教授（化学部長）の浅野三千三が第三講座（生薬学）教授に就任
	8 月	太平洋戦争終結（8 月 15 日昭和天皇「終戦の詔書」放送、9 月 2 日降伏文書調印）
昭和 21 (1946) 年	6 月	連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の指令により薬学審議会設置
昭和 22 (1947) 年	3 月	教育基本法・学校教育法公布
	9 月	東京帝国大学を東京大学に改称
昭和 23 (1948) 年	3 月	臓器薬品化学講座の緒方章教授定年退職、伊藤四十二助教授が後任教授に昇任、高木敬次郎助手が助教授昇任
	4 月	第三講座（生薬学）の浅野三千三教授逝去 54 歳、東京大学立地自然科学研究所助教授の柴田承二が後任
	9 月	宮内庁から委嘱され、朝比奈泰彦名誉教授が正倉院薬物調査団の主班となる
昭和 24 (1949) 年	5 月	国立大学設置法のより新制東京大学発足、法・医・工・文・理・農・経済各学部のほか教養学部と教育学部を新設
	10 月	学部通則改正、修業年限を 4 年とし、前期課程 2 年は教養学部、後期課程 2 年は各学部で教育（医学部医学科は 4 年）
昭和 25 (1950) 年	3 月	第三講座（生薬学）の柴田承二助教授が教授昇任、藤田路一講師が助教授昇任

昭和 26 (1951) 年	1 月	朝比奈泰彦名誉教授が「牧野富太郎博士植物標本保存会」を組織、国庫補助金を得て標本約 50 万点を整理
	4 月	新制教養学部学生、薬学科に進学
	7 月	製剤学講座増設、東京大学医学部附属病院薬局長の野上寿助教授が担当教授に昇任
昭和 28 (1953) 年	3 月	旧制大学最後の卒業式、新制大学最初の卒業式
	3 月	新制東京大学大学院設置（薬学は化学系研究科に属す）
昭和 29 (1954) 年	1 月	慶松勝左衛門名誉教授逝去、77 歳
	9 月	薬品作用学講座増設、熊谷洋教授（医学部薬理学講座）の併任で発足
	9 月	臓器薬品化学講座を生理化学講座と改称
昭和 32 (1957) 年	3 月	第一講座（衛生裁判化学）の秋谷七郎教授定年退職、東京大学伝染病研究所浮田忠之進助教授が後任教授に昇任、奥井誠一助手が助教授昇任
	11 月	高木敬次郎が薬品作用学講座担当教授に昇任
昭和 33 (1958) 年	1 月	生理化学講座に鶴藤丞助教授が所属
	4 月	東京大学医学部薬学科から独立し、薬学部薬学科創立、初代薬学部長石館守三教授
	11 月	近藤平三郎名誉教授、文化勲章受章

昭和期の卒業生					
東京帝国大学医学部薬学科		東京帝国大学医学部薬学科			
年	薬学士	年	薬学士		
昭和 2 (1927) 年	17 名	昭和 21 (1946) 年	34 名		
昭和 3 (1928) 年	16 名	昭和 22 (1947) 年	32 名		
昭和 4 (1929) 年	31 名	昭和 23 (1948) 年	35 名		
昭和 5 (1930) 年	35 名	昭和 24 (1949) 年	24 名		
昭和 6 (1931) 年	27 名	昭和 25 (1950) 年	34 名		
昭和 7 (1932) 年	34 名	昭和 26 (1951) 年	31 名		
昭和 8 (1933) 年	32 名	昭和 27 (1952) 年	34 名		
昭和 9 (1934) 年	36 名	昭和 28 (1953) 年	38 名		
昭和 10 (1935) 年	32 名	東京大学医学部薬学科			
昭和 11 (1936) 年	32 名	年	薬学士	薬学修士	薬学博士
昭和 12 (1937) 年	34 名	昭和 28 (1953) 年	35 名		
昭和 13 (1938) 年	34 名	昭和 29 (1954) 年	33 名		
昭和 14 (1939) 年	35 名	昭和 30 (1955) 年	35 名		
昭和 15 (1940) 年	34 名	昭和 31 (1956) 年	35 名	49 名	
昭和 16 (1941) 年	35 名	昭和 32 (1957) 年	36 名	12 名	
昭和 16 (1941) 年	32 名	昭和 33 (1958) 年	28 名	16 名	11 名
昭和 17 (1943) 年	37 名				
昭和 18 (1943) 年	33 名				
昭和 19 (1944) 年	37 名				
昭和 20 (1945) 年	35 名				

昭和 31 (1956) 年度の薬学修士 49 名は昭和 29 (1954) 年度から昭和 31 (1956) 年度の数

昭和 33 (1958) 年 4 月に東京大学薬学部薬学科創立

日本薬学の復興
-戦中から戦後の歩み-

東京大学薬学図書館

2024年7月16日

執筆 飯野 洋一（東京大学薬学図書館）

tel:03-5841-4705(ex.24705)

e-mail:tosho@mol.f.u-tokyo.ac.jp

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
